
男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

ロンパニール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

【Nコード】

N5846X

【作者名】

ロンパニール

【あらすじ】

ある日、遊んでいた神に間違って殺された少年は、神に怒鳴りながらとある魔術の世界の麦野に転生する。しかし、麦野は男になっていた。またもや怒鳴りながら、少年は生きていく。赤ん坊から始まり、アイテムを作り、「闇」の世界で生き人を殺し続ける。

そんな生活の中、少年は綺麗な容姿から男からも女からも目ぼれされ続け、ついには、レベル5の垣根にも目ぼれされる。※垣根が変態化してます！注意！※感想を誰も送れるようにしました。しかし、私が不快と思う者や、いやがらせ・スパムなどは消

させていただきます。

アアン!!!!!!!!!!?

「遊んでて間違って運命を捻じ曲げちゃった★」とか言われて「仕方ないね★」とかですまされるところだと思ってるのかよお!!!!? クソ神いいいいいい!!!!!!

「だからから・・・違う世界に転生させようと・・・どんな世界でもいけますよーーーー!!!!!!」
だから許してーーーー!!!!!!」

その言葉でオレは止まる。
どんな世界でも? じゃあ・・・

「じゃあ」とある魔術と禁書目録」でもか?

「あっはい、もっちろん! それ★」

ガキがなんか変なステッキ降り始めた。
すると、オレは足元に違和感を感じた。
下を見てみると、穴が開いていた。
直ぐにその穴に落ちていく。

「ちよっ!!!!!! まだ誰に転生するとかいってねえだろおがぁ!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!」

「大丈夫です★あなたの性格にぴったしな人ですし、性別も変えま
すから★・・・やっとな怒られなくてすむ・・・」

「テメー!!!!!! グラァッ!!!!!! 今の本音だろおとおおとおおお

お!!!!!!!!!!!!!!」

怒鳴っているうちにも、オレは落ち続ける。

ガキの姿も見えなくなっちゃった。

もしまた会ったら殺そう。そう思った次の瞬間、オレの意識はなくなっ

第2話 10歳です

ん？なんか目の前がいきなり明るくなった。

頭が痛い・・・えーと・・・オレは何してたんだっけ？

確か・・・クソ神に間違っただけで殺されて、それでとある魔術の世界に転生して・・・

そういや、俺って誰に転生したんだ？

そう思い、オレは瞼を開ける。

すると、視界に入ったのは笑顔の女と男だった。

あれ？と思い、オレは何度も瞬きをする。

駄目だ、消えねえ。てっことは夢じゃない・・・

・・・いや待て待て待てい！！

オレは知らねえぞこいつら！！会ったこともねえ！！

何でオレのことニコニコしながらみてんだよおおおおおお！！！！

気持ち悪い！一発殴って逃げ・・・

手足を動かそうとして違和感を感じた、動きにく！！何これ動きにく！！

この服動きにく！！何度でもいう、動きにく！！！！

オレは自分の手をみる、すると、オレの手は赤ん坊のように小さかった。

ん？何でオレの手小さいんだ？もしかしてあの神、腹の中にいたときに転生させたのか？そうなのか？だとしたら・・・

ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だな

あつこれオレの口癖。

とりあえず、あの神は次あったら絶対殺す、原型とどめない様に穴あきにしてやる。

そう誓い、オレは眠った。

もうこの状況を突破するには眠るしかない判断したからだ。

あれから何年たっただろう。

10年だ。つまりオレは10歳だ、小5だ。

いや、オレも結構大きくなったな。

てか、オレは誰に転生したのか分かった。麦野だ。麦野沈利だ。

だけどなあ、おかしいことにオレは男だ。つまり麦野が男になってたんだよ。

名前もちよーと変わって麦野 沈鳴^{しずなり}。へへ、沈男じゃなくてよかつたぜ・・なんか男だとありきたりすぎるからな。

今のところ、クソ神は一度も現れていない。くそっ早く出てこいよ。赤い綺麗な死体にしてやるからよおおおおおおおお！！！！！！

とつまあ、本題に入るか。てか、何話せばいいんだ？
とりあえず、オレの親は大金もちだった。

しかも一人息子のオレに超超ちよ～～～～う甘い！！
オレがあればほしいなくて少しでもいえば買ってくれる。
金は大丈夫なのか気になったが、全然大丈夫だった。

メイドも召使もたくさんいるは、オレ専用の執事もいるわけでこりやたまらないね！

あー楽しい！！愉快だなあ！！！！

まっ、ここの暮らしは十分満足だ。

能力の方も満足だ。

オレは第4位だ。クソ、第4位って気に食わねえなあ、誰だあ？オレより上のやつは・・・

確かクソモヤシとクソメルヘンだったなあ？まあそれは仕方ない。
オレが気に食わねえのは第3位、御坂だああああああああああ
！！！！！！！！！！

何であんな年下の！！！！しかもメスの方が上なんだよおおおおお
おおおおおおおお！！！！！！！！

認めねえ！！認めねえぞお！！！！いつか絶対に殺してやあああああ
あああああるうううううう！！！！！！！！

「ふうん・・・まっ、それならいいか。第一位になったら後々面倒だな」

許してやるよ。

仕方ねえ・・・

「じゃっ、もう用無しだ。帰れ」

「え・・・あ・・・はい・・・分かりました・・・」

この時のオレの表情を言ってやろう。
清々しい笑顔で帰れって言った。

長い年月が過ぎた。オレは高校2年だ。

まっ、ほとんど通わずに家の中にいたけどな。

だってなあ？ 簡単過ぎんだよ。問題が。

ノートとらなくてもテストは90点台とれるし・・・面白くねー。

とっ、言うわけで、こんな暇な生活を自分で変えてみようと思う。

まあ、とりあえず家から出ないといけねえな。

何しよっかな・・・

家から出たオレは、外をふらつく。

なぜか女子がキャーキャー黄色い声を上げるが無視する。

うるせえんだよ、キーキー泣くんじゃねえ。めざわりだなあ・・・いっそ殺してやろうか・・・

んっ・・・？殺す・・・？

いいこと思いついた！！原作の麦野もやってたことだからオレにもできるな！！

そう思い、オレは路地裏に入り、走り回った。

狙いは「闇」の世界の人間に会うため。

なんか面白そうじゃねえか。人をプチプチ殺すのはよお。

ひひひっと笑いながらオレは角を曲がる。

すると、だれかにぶつかった。

「いてえな！！ちゃんと前みやがれ！！」

見てなかったのはオレだがオレは謝らない。

オレが悪いなんて認めない。オレはいつだって正しい。

「はうっ・・・！！じゃなくて！！ぶつかったのはアナタって訳よ！！！」

「あんだと!!!!」

相手が顔を赤らめて変な声を出した気がしたが無視をする。
知らないガキに口答えされたことに頭に血が上る。

オレに向かってそんな口きいていいのか？その体真っ二つにするぜ。

「・・・？あなたって、「闇」の人間？・・・目が濁ってないけど・・・」

「あぁん？今からなろうと思ってたんだよ。テメー、「闇」の人間か？」

「「闇」のこと知ってるんだから、結局私は「闇」の人間って訳よ！
貴方は「闇」に入りたいの？だったら私としない？」

結局、アイテムって組織作ったわいいけど、メンバーが私しかないな
って訳よ」

「ずいぶん寂しい組織だなオイ。てか、それ組織っていうのか？」

「細かいことは気にしない!!ねっ、いいでしょ!!?」

オレは考える。

確か・・・麦野が居たのは・・・「アイテム」・・・!!

・・・なんつー偶然だ。早速仲間が見つかった。これを逃したら次
はねえな。

「分かった分かった。ただし、リーダーはオレだ。オレは誰かの下につくなんてことは嫌だぜ」

「ええ！？それはちよつとワガママすぎるって訳よ！！」

「いいのか？オレが入らないとメンバーは増えない。それに・・・」

金髪頭の外国人のガキの耳に口を近づけ、続ける。

「断ったら・・・後悔するぞ・・・」

「／／／！！！！・・・わっ・・・分かってわけよ・・・」

脅したつもりでいったんだけど・・・なんで顔が赤くなるんだ？
わかんねえな・・・まっ、いいか。リーダーになったからな。
オレはガキに手を伸ばす。

「オレの名前は麦野 沈鳴。よろしくな、クソガキ」

「ちよっ！！私にはちゃんとした名前があるって訳よ！！
私の名前はフрендаⅡセイヴェルン。フрендаってよんで。よろしくね、麦野」

俺たちは握手を交わした。

そして、次の日から仕事が始まり、オレは暗い世界の住人になった。

第4話 初任務は人殺し

あの後、フレンダのアドレスをもらい、オレは明日に備えて寝た。そして、今起きようとして睡魔と闘ってる。

だってなあ・・・いつも昼近くまで寝てるからな・・・眠い・・・でも起きないと・・・眠い・・・ねむ・・・zzzzはっ！！

駄目だ駄目！今日は早速の初任務じゃねえか！しっかりしろ！オレ！！

オレは一気にベットからでる。

ゆっくり出たら一生出れない気がしたからだ。

ニートって・・・いいな・・・

「遅いって訳よ！だいたい今日はせつかくの任務なんだよ！？なの
に……」

「うるせえ、オレに指図すんな」

集合場所に着いたらフрендаがギャーギャー言い始めた。

五月蠅いので眉間にしわをよせ、低い声で脅す。オレに説教するとはいい度胸じゃねえか。

殺してやろうか。いや、駄目だな。こいつを殺したらこの後の仲間集めが大変になる。

「今日の任務はここで取引する人間を一人残らず殺すこと。
結局、最初の任務はこんなものって訳よ」

「へえ……腕ならしにちょうどいいな」

殺すだけか。これならメルトダウンー撃てば終わりだな。

正直、施設を気づかれずに破壊するとか細かい任務じゃなくてよかったぜ。

「いっとくけど、「表」の人間にばれないようにしないといけないのよ?。」

・
・
・
・
・
チ
ツ
！

目的の場所に行き、取引をする「闇」の人間が来るのを隠れて待つ。どうせなら固まっているところを一気にやったほうが楽だからな。おっと、来た来た・・・

オレは息をひそめて一か所に固まるのを待つ。

すると、運よく、一か所に固まってくれた。ずいぶん馬鹿な奴らだな。

命を狙われてるとはしらずに・・・な？

オレはフレンダを見る。

フレンダはOKとサインをする。

オレはうなずくと、手を「闇」の人間に向け、撃つ準備を始める。すると、こっちに気付いたやつが銃を構えた。

遅いんだよ、ゴミ。

ギュオンッ！

「ひいっ!!」

「ぎやあああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 あああああああ！！！！！！」

「」

恐怖に顔を歪め、断末魔をあげながらオレのメルトダウナーに飲み込まれていく。

いつものように物を壊すような感覚じゃない。何か・・・何か・・・命を消すような感覚？みたいな・・・

快感

[illegible]

オレは笑う。

もう完全に「闇」の人間になった。

人を殺すのってこんなに楽しいんだな。

おもしれえ・・・おもしれえなオイ！！

オレは暫くの間笑っていたが、しばらくすると、ぽっかりと心が開いたようになってしまった。

なんだろう・・・空しいな。

オレはもう人間じゃない。

人を殺す「化け物」だ。

フレンダ

凄い・・・私は麦野の能力を見たとき、素直に思った。

あんなにいた人間を、たった一発で跡形も残さずに消し去った。

結局mレベル5の威力は、私の想像を超えてたって訳よ。

人を殺した後の麦野は狂ったように笑った。

口が引き裂けそうになるまで開き。

今は快感を感じてるんだろう。

だけど、すぐに空しくなるって訳よ。

私も最初はそうだったから。

だけど、結局、今でも人を殺した後は空しいって訳よ。

もう、私たちはもとはに戻れない。

第5話 慣れればいいんだ

「んじゃな、フレンダ」

「ばいばい、じゃっ、明日もよろしくって訳よ」

オレはフレンダに手を振り、家に向かう。

まだ心に空しさが残ってる。

オレは人を殺したんだ。もう「闇」の人間だ。「闇」の・・・

・・・人を・・・殺した・・・

オレはフラフラしながら家のドアを開ける。

家に入ると、家の匂いがして、なんだか落ち着いたが、心にあった空しさが喉にこみ上げてきた。

急いでトイレに向かい、胃の中のものと一緒に空しさもすべて吐き出す。

「げふっ！ごぶおっ！！・・・はぁ・・・はぁ・・・」

全て吐き出してから、自分のしたことを思い出し、もうほとんど出したのに、喉に指を入れ、さらに出す。

何でだ、人を殺すだけじゃねえか。女にもできたんだぞ、なんでオレにできねえんだ？

何でだ・・・なんで・・・ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ

初めて、人を殺して人の命の重さが分かった。

前の人生では、オレは好き放題して普通に「死ね」「殺すぞ」なんて言って喧嘩してた。

もちろん、人は何回も殴ったことはある。

・・・思い出した・・・初めて人を思いっきり殴った時、オレは今と同じような状態になったんだ・・・

でも、何回もやってるうちに慣れて・・・そうだ、慣れればいいんだ。なれたら、喧嘩の時みたいに普通に殺れる。

そうだ、何回も殺せばいいんだ。そうすればいいんだ。

そう思い、オレはその日、晩御飯を食べずに寝た。

「遅おおおおおおおい！！！！！！オレを待たせるとはいい度胸だなフレンダァ・・・」

「ひいーーーー！！ゆっ許しって訳よ！！」

「その？訳よ！？・・・はふざけんのかあああああああああああああ
ああ！！！！！！」

「ぎゃーーーーー！！」

キレる麦野と涙目で謝るフレンダ。

はたからみればイケメン不良が喧嘩を売ってるしか見えない。
周りが自分たちを見てるのに気付いた麦野は、フレンダを引っ張って路地裏に行く。

「たくっ、テメーのせいで勘違いされるじゃねえか」

「いや・・・結局、それは全部麦野のせいって訳・・・」

「ああん！！！？？」

不良顔負けのすごい顔でフレンダを睨む。

フレンダはあまりの怖さに声も出せず、涙も出ず、その場に座り込み、がたがた震える。

「ちっ、さっさとしようぜ。今回も人を殺すだけ・・・うつ!!」

まただ・・・また吐き気が・・・

昨日から人を殺すのを考えるだけで吐き気がする。

しっかりしろ！オレ！！今日はこれをこくはくするために来たんだろうが。これくらいでへばってんじゃねえよ！！

オレは何とか吐くのを抑えると、動けないフレンダを引きずって目的地向かう。

・・・さっきで風紀委員とか呼ばれてねえよな？

辺り一面、真っ赤に染まる。

全部、オレが殺したやつの血だ。

オレはまだ息があるやつに向かって止めのメルトダウンを撃つ。
敵は跡形もなく消える。

今殺したので、だいたい30人くらいだな。

もう、吐き気はない。快感しかない。

そうだ、これでいいんだ。いちいち吐いてなんかいらねえ。オレはどんなことをしてでも進むんだ。

たとえば人を殺してでも。

「・・・フренда。あと何人くらいだ？」

「えーと・・・だいたい20人くらいね。結局、麦野にかかればあつというまって訳よ！」

「うーし。さっさと終わらす・・・ぞ!!」

固まってたやつに撃つ。

さっさと終わらせて寝よう。そうしないと気が持たない。

「おいおい、逃げ回ってんじゃないよ!! ゴミのくせに手間かけさせんなあ!!」

オレの性格も狂ってき始めた。

第6話 仲間＋2

ある日、いきなりフレンドが変なことを言い出した。

「もっと仲間が欲しいって訳よ!!」

「・・・はあ？」

携帯をいじるのをやめて、フレンドを睨む。

恐がらせたつもりなのに、なぜか頬を染められた。ドM？ドMなのか？まさかフレンドがそんなキャラだったなんて・・・!!

「バリ引くわ。近寄んな」

「何で！？じゃっなくて！結局、今のままじゃ少ないって訳よ！もっと仲間がいるの！」

バンバンと、ポテトを食べてた手で机をたたく。

おいおい、これこのファミレスの机だぞ、汚くなるだろうが。

後で机を拭かせよう、フレンドに。

「別にいいんじゃないの？別に二人でも、オレが居ればすぐに終わるじゃねえか」

そういったんだが、フレンダは納得しない。
めんどくせえな・・・

「だって、もし大きな施設で協力してやらなきゃいけないときに人数が足りなかったらどうするの？ やっぱ、後二人欲しい」

「・・・つまり、お前は喋る相手が欲しいのか？」

「なっなんで分かったって訳よ！！ テレパシー！！？ テレパシー！！？」

「馬鹿か。能力は一人一つまでだ。それくらいも分かんねえのかよ」

「それくらいは分かってるって訳よ！」

「そういい、ない胸を張る。
・・・貧乳だな。」

「今、何か失礼なこと考えなかった？」

「別に？」

「お前もテレパシーっぽいを使えんのかよ。」

プルルルルル・・・プルルルルル・・・ガチャ

「あゝ？お前かゝ？安心しろ、今日は厄介ごとじゃねえよ。二人くらいアイテムに仲間が欲しくってなあ。二人よこせ。ああん？能力者だぞ、レベル4じゃないとだめだ。男でも女でもいい「女子がいいって訳よ！！」・・・どっちも女だ。じゃあ、よろしくな」

電話を切る。

今、かけてたのは、「闇」で知り合ったやつだ。

脅してアドレスもらった。

まあ、これで仲間の心配はねえな。

「うーし、サバ缶でも買いに行くか」

「あっ、私も買う！」

俺たちは店に向かう。

俺たちは、サバ缶を大量に買い、アジトで食べている。
大量に買ったら、なんかあのモヤシみたいだな。

そう思いながら、二つ目を開ける。

うん、やっぱりサバ缶はうまいな。フрендаとオレって結構気が合
うんじゃない？

「結局！サバ缶は最高っ！！て訳よ！！！！」

「おゝ、とうとう頭がおかしくなったか？」

「なっていない！いたって正常！」

フрендаをからかいながら、仲間が来るのを待つ。
アイツは仕事だけは早いからな、すぐに来るだろ。

「あなたたちが、『アイテム』ですか？」

「かっこいいひと・・・」

おっ、来たな。

なんか滝壺が変なこといつてたけど無視だ無視。オレはいたって普通の顔だ。カッコイイなんてありえねえ。とりあえず、自己紹介からだな。

「ああ、オレは『アイテム』のリーダー。麦野^{むぎの} 沈鳴^{しずなり}だ。こいつはアホメア」

「ちよっ！違う！！あつ、麦野のことは無視してね。私の名前はフレンダⅡセイヴェルン。よろしくって訳よ！」

フレンダが手を出すと、スカートの丈がギリギリのガキが握りかえした。

とあえず、オレのことを無視していいとかいいやがったから拳骨5発くらわしといた。

「私の名前は絹旗^{きぬはた} 最愛^{さいあい}です。超頑張りますんで。よろしくです」

「滝壺^{たきつぼ} 理后^{りこう}。よろしく」

オレはまじまじと二人を見る。

正直言つて、オレは『アイテム』に興味なかったし、アニメは見てねえ、漫画は『とある科学の超電磁砲^{レールガン}』の一巻しか持ってなかった。『アイテム』のメンバーって個性豊かだな。

これから面白そうだな。

オレはふつと笑う。

すると、なぜかガキ3人がこっちみて顔を赤く染めた。
ん？オレなんか卑猥なこといったかしたか？

「何で顔赤くなってんだ？」

「・・・ちよっ超なんでもありません！！！！本当に！！！」

「・・・惚れ「あーーーーー！！！！今日の任務はなんだろうなーーーーー
ー！！！！」・・・」

なんか滝壺が「掘れ」とか言つてたけど、何を掘るんだ？この地面をか？

掘れ？彫れ？わかんねえ。もういいや。

「まっ、いいや。じゃあ、早速仕事に行くぞ」

「「はーい」「」

「んっ、元気がよろしい」

笑いあいながら場所に向かう。
これからある施設の中にいる人間を全員殺す。

第七話 筋トレ

ある日、オレは思った。

肉体戦の時のために体を鍛えた方がいいんじゃないかと。

「とっ、言うわけでお前らも鍛えろ」

「何で私たちも巻き込まれるんですか。超めんどくさいです」

「ん〜？なんか言ったかにゃ〜ん？き〜ぬ〜は〜た〜？」

「いえ、超言ってますん」

ギロリと睨み、絹旗を脅す。

絹旗は、すぐに先ほどの言葉を取り消した。

はっ、オレに逆らうんじゃねえよ。

「じゃっ、早速今日から行くぜ」

「ん？どこに？」

「どこにつて・・・ジム」

何だよ、その顔。

先生とかに教えてもらうの嫌なんだよ。異論は認めねえぞ。

今、オレの隣には、ばてている三人がいる。
体力ねえなゝ

「おいおい、どんなけ体力ないんだよ」

「む・・むぎのがありますぎなんだ・・・よ・・」

「そうだよ！結局、私たちはか弱い女の子って訳よ！？」

「か弱い？どこにか弱い女子がいるんだ？」

「ここですよ！！」

オレはわざとウロウロと周りを見渡す。

すると、二人がぴょんぷょん飛んでオレの視界に入ろうとする。

はっはっはっ、無駄無駄。180センチの身長のおレの視界にお前からみたいなチビは入らねえよ。

そういうと、滝壺を除いた二人に蹴られたので、一発ずつ至近距離からギリギリ外れるメルトダウンナーを撃つといた。

絹旗ア。お前、能力使ったから痛えじゃねえか。

さて、鍛え始めた日から、何か月も過ぎた。
あん？時間が経つのが早い？気にすんな。こんなことを気にしてたら人生損するぞ。
何を損するのか知らねえけど。

まあ、とりあえず。オレの体は程よい筋肉が付いた。
あれだあれ、細マッチョだ。

それに実践もしてみた。

とりあえず不良に喧嘩売りまくった。まあ、全部勝ったけどな。
これで肉體戦は何とか大丈夫だな。

さうて、そろそろ後ろのフレンダ達も相手を全員殺す頃・・・

プルルルル・・・プルルルル・・・プチ

「あんだよ、クソ女。邪魔すんな。じゃあな」

「アンタたちの暇つぶしになりそうな事件が起きたわよー。見てるだけで楽しいわよー」

「ああ、？連続虚空爆破グラビドン？だろ？これからそれを探すんだよ。じゃな」

問答無用で消す。

まだ女が叫んでたけどまあいいか。

「さーて。さの連続虚空爆破を見に行きますか」

「たのしみだね」

「はい、超楽しみです」

オレの後を、面白そうに3人が続く。

第8話 捕まえた

よく考えたら、どこで事件が起こるのか知りませんでした。
どこで事件起こるんだっけ？

「・・・確か友達が、お花畑のやつがでかいデパートの服屋の中で
巻き込まれてあるって・・・」

そうだったよな？よく覚えてねえけど。
だー！こんなことならもつと友達に詳しく聞いてればよかったぜ！
とりあえずお花畑だよな？お花畑・・・

オレは周りを見渡す、すると、運よくそのお花畑のガキを見つけた。
なんだよあれ、頭パーか？

「何ですかあれ。頭超可哀そうな人ですか？」

「結局、人間ってのは人それぞれって訳よ。そっとしておいてあげ
よう」

「あたまがおかしいの？」

3人がなんか失礼なこと言ってんなあ。
そんな失礼なこと口に出すんじゃないやねえよ。

可哀そうだろ。いくら頭が可哀そうでも

→

お前が一番失礼

てか、あんな頭してよく外に出れるよな。花とれば誰だか分からねえんじゃねえのか？

何だ？周りのやつも、あまりの頭の悪さに気にしない様に氣遣ってみない様にしてるのか？

いい人たちだな・・・

→

お前失礼すぎだろ

「なんだか視線を感じます・・・」

あつ、ごめんそれオレ。
がん見してるから。

まっ、とりあえずアイツについていけばいいんだよな？
だけど、オレ結構目立つな・・・なんか女子の視線が痛い。

→

それは君がイケメンだからだよ。リア充爆発しろ

作者オレに冷たいな。

「・・・麦野・・・これは何って訳よ・・・」

「ばれないように変装しないといけないだろ？完璧だぜ！」

化粧品を片手に、オレは満足そうな顔をする。

たぶん、今のオレに顔はきらきら光ってると思う。

フレンドは黒い髪のカツラをかぶらせて、目元を濃くして目を大き

く。

絹旗は服装をジャージにして、髪の毛も括り、眼鏡。

滝壺はおしゃれな服を着せておしゃれな帽子もかぶらせて髪の毛もパーマにした。

よしっ！これで一目見ただけで分からねえだろ☆

ちなみにオレの変装は、女装だ。

いや、レベル5の第4位がストーカーしてるとか言われたら嫌だし、これしかないんだよ！

髪の毛がパーマがかかった金髪のロングのカツラをかぶり、軽く紅をさし、肩幅が分からない様に肩のところが毛でおおわれている服。もちろんズボンだ。スカートとかありえねえ。

「……麦野、似合ってる」

「そんなこと言われても嬉しくねえ」

女装をほめられも嬉しくないんだよ滝壺。まあとりあえずこれで目立たないだろう。オレ達は花ガキの跡を交代で追いかける。

最終的についたのは、大きなデパートだった。

ここか、ダチが言ってたのは。ここで事件が起きるんだ。

丁度暇だったから犯人をボコッて捕まえて警察にでも突き出すか。

しかし・・・なんでだ？視線が痛いままだが。もしかして男だっただけでんのか？

だとしたらやべえな。事件みたらさっさと帰ろう。

そう思ってたら、放送が流れた。

能力を感知したようだ。とっ、さっさと店の外に逃げて路地裏に行こう。

俺たちは急いでデパートをでる。

「行くぜ」

「超了解」

さっさと犯人氣絶させて帰ろう。
もう視線が痛すぎる。

オレは路地裏に向かう。

すると、不気味に笑いながら学生が路地裏に入って行った。
ラッキー、犯人あいつだな。

オレはにやりと笑いながら学生の跡を追う。

「くくく・・・今度こそ逝っただろう・・・素晴らしい！！素晴らしい力だ！！これで僕を馬鹿にしたやつらを吹き飛ばして」

「よお、ガキイ。こんなとこで何してんだ？」

「！！？」

ひとりで盛り上がったガキに声をかける。
驚いてる驚いてる。その顔が一気に恐怖に変わるときが一番面白いんだよね・・・

「邪魔だからさっさと捕まってこい」

「ひいっ！！！！」

ズドンッ

メルトダウナーが、ガキの顔のギリギリを通る。
一気に恐怖の顔になりやがった。
いいねえ、その顔。

「何の力もないやつが、めんどくさいことしてんじゃねえ・・・よお
！！！！」

「ぐぶっ！！」

腹に蹴りを入れる。
内臓大丈夫かなあ・・・とっ！！

ズンッ！！

「げはあっ！！」

もう一発蹴りを入れる。
すると、ガキは吐きやがった。

「おいおい！この程度かよゴミ野郎！！もっとオレを楽しませ・・・」

いや、待て。直ぐにあのガキが来るはずだ。
ここは引いた方がよさそうだな。
仕方ねえ。

「命拾いしたな」

「ぐう・・・ぐはあ・・・」

腹を押さえて苦しそうに息をするガキを置いて、俺たちは路地裏から何事もなかったかのように出る。
すると、すぐ後ろでガキの声がした。

胸糞わりい・・・いつかテメーを地獄に叩き落としてやるからなあ・・・
・・・覚悟しとけよ超電磁砲^{レールガン}

第9話 つまんねえ、もっと

「暑い〜〜〜!!!! 溶ける〜〜〜!!!!」

俺は大声でいう。

すると、周りのやつらがオレを見る。

チクショウ、見てんじゃねえよ。暑いもんは暑いんだ!!!!

「麦野くプール行きた〜い!!!!」

「ついでにあの世行って来い」

「何で!?! なんか麦野って私に冷たいって訳よ!!!!」

「それはだな・・・お前の反応は面白いからだ」

「ひどい!!!!」

フレンダで遊びながら、オレは、変わった曲が流れるのを待つ。

そろそろ、クソガキが昏睡状態のカスどもの目を覚まさせるころだ。

・・・てか、ホントに熱い・・・水分が全部無くなって死んじまうぜ・・・

あつ、そういえば!

「プール借りっぱなしだったな・・・」

ぼそりとつぶやく。
すると、フレンダが食いついて来た。
よほど熱いらしい。

「ホント!!? 行こうよ!! 結局、このままだと今日はすることは
何もないって訳よ」

「・・・そうだな・・・行くか」

「本当ですか!!? 超感謝します!!」

「浮いて漂うスペースある?」

「・・・滝壺・・・泳ごうか」

浮いて漂うスペースってお前・・・事情を知らねえ奴が見ればおぼ
れた人にしか見えねえぞ。

せめて、バタ足でもいいから泳げ。

立ち上がろうとしたその時、不思議な曲が流れ始めた。

なんだ・・・この曲・・・五感に訴えるような・・・言葉じゃ表せな
い不思議な曲だな・・・

まっいいか。これで昏睡状態は溶けるはずだ。もうオレには関係ね
えし、正直、こっから先の話、知らねえんだよ・・・
あんまり友達と、とある魔術の話しなかったからな・・・

「・・・不思議な曲・・・」

「こんな曲、どうでもいい。行くぜ」

そうだ、もうオレには関係ないんだ。

これから適当に過ごせば、あのガキと会うだろ。

その時は・・・アイツを跡形も残さず吹き飛ばす!!!!

あれから、日が過ぎた。

オレは今、任務をしている。

邪魔者を消すっていう任務を。

「ひいっ・・・ひいっ！！！！」

「助けて・・・げはあっ！！」

「助けて？おいおい、何敵に助け求めてんだよ。助けるはずねえだろうが」

オレは、男の腹をける。

男は胃の中のものを血とともに吐きだし、呻く。
さらに腹をけると、もっと血を吐き出した。

「つまんねえな・・・つまんねえな・・・やっぱテメーらゴミカスじゃあ相手になんねえな・・・」

後はフрендаに任せて、オレは電話をいじり始める。

はあ・・・最近つまんねえな・・・ガキとも会ってねえし。

つまんねえ・・・つまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえ・・・

「つまんねえんだよクソやろおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！！！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアッ！！！！！！」

八つ当たりで、近くにいた、まだ息のある男の腕を思いつきり踏み、
腕を砕く。

男は、絶叫をあげる。

まだだ・・・まだ足りねえ・・・もっと悲鳴をあげろ

もっと血を出せ

くそっ、このイライラしてる時に・・・
そう思いながら、相手の話を聞く。

しかし、そのイライラは収まってきた。
内容が面白かったからだ。

「防衛戦」

頭を使うため、少しは面白くなるだろう。

オレ達は残りを始末し、車に乗り込む。

目的地に向かう最中、詳しい説明を受ける。

おもしろそうだな・・・

オレはにやりと笑う。

すると、3人があれこれ言い出した。

「いい？ 麦野。絶対に傷ついちゃ駄目だよ？ 私たちが頑張るって訳だから」

「はあ？ 別にいいだろ、オレの体なんだから」

「ダメです。超駄目です。せっかくきれいな顔が傷ついてお嬢に行けなくなったらどうするんですか？」

「別にいいし。結婚するきねえし」

「それはそれでもつたいないよ？ 麦野」

「・・・なんで？・・・」

ん？今、この話どうでもよくね？

目的地につくまで、オレは3人にいろいろ言われ続けた。
こら運転手、笑うな。

第10話 作戦

目的地に着いた俺たちは、すぐに研究所の本部に行き、カメラなどを全て切ってもらおう。

敵は、中心部の大きな機械があるところを狙う、だから、その近くで俺たちは戦う。

カメラなんかあってもオレがメルトダウンー撃ちまくって壊しまくるから意味ねえだろ？だから切ってもらおう。

施設は、2つ・・・か・・・よしっ！

「フレンダ。お前はここに残って敵が来るのを待て」

「ええっ！？私だけ仲間はずれ！！？」

「違うわ」

ちよっとは頭使えよカスボケ無駄脚線美。お前みたいなたな
お子様にはそんな足必要ねえんだよ。

「いいか？残りの施設は2つある。絹旗は、もう一つの施設に行ってもらおう」

「やっぱり結局仲間外れって訳よお！！ゲフッ！！」

「人の話を聞けーーーー！！」

オレはフレンダの首を絞めて、静かにさせる。
死にそう？大丈夫だ、コイツはゴキブリ以上にしぶとい・・・と、
思う。

そのうち、フレンダがオレの手を叩いてきた。

「む・・・むぎの・・・！苦しいって・・・訳よ・・・」

「よし、静かになったな」

オレは絞めるのをやめる。

話した途端、フレンダは必死に息を吸う。その背中を滝壺が優しく
なでる。

いい子だな、滝壺は。

「いいか？襲撃者は単独犯であると推測されてるけどな、一方の襲
撃が陽動であると、可能性を捨てるべきじゃねえんだ。防衛組、つ
まり絹旗は、施設襲撃の報を聞いても対処は俺たち、遊撃隊に任せ
て自陣を堅守する。・・・頭がすっからかんのフレンダでも意味が
分かったかにゃーん？」

オレがそう説明すると、フレンダは仲間はずれにされたんではない
と分かって顔を輝かせた。
すげー、変わりよう。

「分かった!! それじゃあ仕方ないね☆・・・でも・・・」

「でも?」 (にやにや)

「頭がすっからかんって納得いかないわけよーーーー!!!! このっ! このっ!!」

オレをポカポカと叩き始める。

「はっはっ、効かねえな。まあ、オレに本気でしたらどうなるのか・・・フレンダは一番分かってるよなあ?」

「うっ!!」

ピタッと動きを止める。

オレに余計なことをしては言っでは、フレンダはオレから痛いお仕置きを受けている。

ある時は、至近距離からの、ギリギリはずれるメルトダウンナー。あるときは、2階から宙吊り、ある時はプロレスの関節技10連発(10秒間) ある時は刃物を振り回しながらの楽しい鬼ごっこ。ある時は・・・ありすぎて全部言ったら日が暮れるな。やめよう。

「それじゃあ、麦野。行ってきます」

「おう」

オレは笑顔で言う。

絹旗の顔が少し赤くなったんだが・・・いきなり風邪ひいた？まじ？
慌てて引き止め、熱が無いかどうか、でこ同時をくっつけ、大丈夫
かどうか聞く。したら、顔をさらに真っ赤にした、焦って逃げる
ように行ってしまった・・・オレの顔恐かったのか？

「・・・オレの顔って怖い？」

「「全然」」

「そうか・・・」

だったら何で逃げるんだよ絹旗。オレは少し傷ついたぞ。


~~~~フレンダ~~~~

「ふう・・・」

私は、ヌイグルミに囲まれながら、あおむけに寝転がる。  
そして、先ほどの絹旗と麦野とのやり取りを見て・・・腹をたて、  
ヌイグルミを投げ飛ばし、ものにあたりはじめる。

「くそっ！！絹旗ずるいって訳よ！！！！結局私だって麦野が好きな  
んだから！！！！・・・羨ましい~~~~~~~~！！！！」

麦野とでこ当て！！！？でこ当て！！！？絹旗ずるい！！わざと顔を赤

くしたんでしょ!!? そうでしょ!?

さすが、見えそうで見えないギリギリを考えて計算してる絹旗! 結局頭賢い!!

・・・はぁ・・・私も能力者なら・・・頭もよくなって麦野とラブラブする作戦を立てまくれるんだけどなぁ・・・結局、自分が持つてる才能が無かったって訳よ・・・

「ライバル多いもんな・・・どうにかして私に惚れさせるんだから・・・」

絹旗に八つ当たりしたってしょうがない。

いまは、どうにかして気を引かないと。麦野の美貌だから、男子の中でも麦野に惚れてるやつはいるだろうし・・・女子なんか、麦野を見た途端、目がハートマークになってるし・・・

・・・麦野は私のものって訳よ!! 絶対に恋人になるんだからーーーーー!!!!

私はまた暴れ始める。

その時、足音が聞こえた。

暴れるのをやめ、私はニンマリと笑う。

そうだ、ここで侵入者を一人で倒して、麦野に褒めてもらおう。

私が強いことが分かれば、結局、私と麦野の距離はぐっと縮まるって訳よ!!

そうと分かれば・・・直ぐにいかないとね♪

私はスキップで侵入者のもとへ向かう。

## 第11話 フレンダVS御坂（前書き）

スパムが来たため、ユーザー以外の感想は受け付けられない様にしてみました。誰でも感想を送れるようにしました。

感想でもいいし、こうすればよくなるとかでもいいです。

しかし、私が不快になる発言や、嫌がらせなどのスパムなどは、問答無用で消します。そのところ、分かってください。

## 第11話 フレンダVS御坂

〜〜〜3人称〜〜〜

フレンダは早速、侵入者の元に行き、仕掛けの準備をする。  
すると、侵入者のだいたいの姿が見えてきた。

（顔は暗くてみえないわね・・・まっ、いいか。結局死ぬんだし）

そう思い、相手について深く探るのはすぐにやめた。

（相手は電気使い。エレクトロマスターいつものようにリモコン式で導火線をつけてたら逆に支配されそうだから今回は用意してないのよねー。逃げながら火花をつけないといけないから・・・今回は楽しそうね♪）

そう思い、フレンダは線に火花をつける。

これは、フレンダがよく使う道具。これで、ドアなんかも焼き切れる

（いけー！ー！！）

直ぐに、天井が斬られる。

侵入者の頭の上にすごい音を立てて、斬られた瓦礫が落ちていく。  
フレンダは死んだと思った。

しかし、敵は無傷で立っていた。  
顔をしかめる。

（瓦礫が一つも当たらない・・・？磁力で落下物の軌道をずらした  
か・・・どうやら、電気使エレクトロマスタいってのは本当のようね・・・それに  
あれだけ大きな瓦礫を全部ずらしてるから、レベル4くらいかな？  
まっ、たとえば強くても意味はないんだけどね）

ニンマリと笑い、また火花をつける。

今度はただ焼切るだけではない、線の先には、爆弾を入れてある人  
形を置いているのだ。

直ぐに1つ目が爆発し、敵はそこらへんにあった壁の破片みたいな  
もので防ごうとする。しかし・・・

（結局、どれだけ頭がよくても、私の読み通りって訳よ！！）

そう、瓦礫の中には電気に反応して爆発する爆弾があるのだ。

敵はすぐに気づいてしまい、瓦礫を飛ばす。

（おっしーい。気づかなかつたら殺せたのに・・・さっさと殺して  
麦野に褒めてもらおう）

そう思い、次々に線に火花をつけていく。  
だが、敵はしつこく、なかなか攻撃が当たらない。  
次第にフレンドは焦り始めた。

〵〵〵 麦野 〵〵〵

「おっ、フレンダの所に敵がきたみたいだぞ。行くか」

「うん」

オレは立ち上がり、用意してあった車に乗り込む。  
とっ、その前に・・・

「これを忘れたらいけないんだよなあ・・・今回も頼むぜ滝壺」

「うん、まかせて」

オレは体晶を手の上に転ばせる。

これがあれば、俺たちから逃げられるやつなんかどこにもいなくなる。

だけど、滝壺の体に負担がかかるからな・・・いちよう、大丈夫か聞いたくか。

「おい、滝壺。本当に大丈夫か？お前、しんどいとか寝不足とかないか？」

「ないよ。大丈夫だよ麦野。わたしががんばるからね」

「・・・いいか？きつくなったらすぐに能力を使うのをやめろよ。」

「お前は自分を大事にしろ」

「うん・・・ありがとう、麦野」

「んっ、分かればよろしい。じゃっ、行くぜえ」

俺たち二人は、急いでフレンダのもとへ行く。

アイツ、今ごろ敵に追いつめられていねーだろうな・・・？

~~~~~フレンダ~~~~~


なんなのよこの女~~~~!!?!

磁力で地面を持ち上げて線を断ち切るわ、クモみたいに壁を走るは・

・・!

今はまだ嘘を信じてこっちが有利だけど、結局すぐにこんな嘘ばれるかもしれないし・・・

麦野~~~~!!早く助けてって訳よ~~~~!!!!!!

→

麦野の予想通り、追いつめられている

は!ダメダメよ!!麦野にやればできるってことを見せるんだから!!

麦野との距離を縮めるんだから!!麦野の彼女になるんだから~~~~!!!!

そのためには!!このクモ女を・・殺す!!

私は、靴のかかとに仕組んであった刃物をだし、回し蹴りをする準備をする。

そうねえ・・・最後に少しだけお話しようか♪

「最初、私はアンタに人の人生なんかどうでもいいっていったでしょ?でも、止めを刺す時だけ灌漑深いものがあるのよねー」

「・・・」

「命を積む、まさにその瞬間、私は相手の運命を支配した気分になれるの」

「・・・!!」

ふふ、知りたい？ 言ってあげるわよ・・・

「結局、コイツは私に殺されるためだけに生まれてきたんだってね？」

「・・・」

もう、ショックすぎて何も言えないみたいね・・・さて、最後の仕事と行きますか。

さあ、いい叫び声を・・・

「聞かせてちょうだい！！！！！」

私は渾身の回し蹴りを敵の横腹めがけて放つ。
これで、相手は腹がえぐられる、はずだった。

「・・・ふざけんじゃないわよ・・・運命を簡単に受け入れて・・・
当たり前のように受け入れて・・・ふざけてんじゃないわよっ！
！！！！！」

「げっ！！？」

ギリギリのところ腕で塞がれた。くそっ！もう少しなのに・・・
！！

そう思っていると、次第に相手がなぜか怒り始めた。なっなに！！？
なんか地雷踏んだ！！？
だったら早く逃げ・・・

「ぐえっ！！！」

首絞め・・・!? なっ、なるほど・・・これなら電気技なんてい
らな・・・てっ! このままじゃやばい!! やばい!! やばい!!
こんの・・・調子にのるんじゃないわよ!!

「おらああああああああああっ!!!!」

私は相手を投げ飛ばす。

息が・・・首が・・・!! くそっ!!

そう思ったその時、相手と私を挟んで、極太ビームが通った。
これは・・・!

「よお、ピンチだなあ、フレンダ」

「麦野おおおおおおおおお!!!! Myd^{マイダーリ}arl^ンin
gg.....」

~~~~~3人称~~~~~

（なんなのよ今日は！！厄日！！？）

またもや新たな敵が現れたことで、御坂は焦っていた。  
ひとりでもこれだけ苦戦たのに、さらに2人。勝負すれば確実に殺される。

だが、御坂の目的は勝負ではない、この施設を壊すこと、それなら、なんとかできるかもしれない。

しかし、そんな考えは男性を見て、吹き飛んだ。

男とは思えない美しさとかっこよさを兼ね備えた男性。

一瞬、御坂は見とれたが、すぐに頭を振り、断ち切る。

（てっ！何してんのよ私は！相手は私を殺そうとしてる敵よ！！それに私には・・・）

誰も好きな人などいないはずなのに、頭にあの不幸少年が浮かんだ。顔を赤くし、頭をかきむしる。

（なんであんな奴の顔がでてくるのよー！ー！ー！べっ！別に私はアイツのことが好きじゃないのに！ー！絶対好きじゃないのに！ー！ー！！）

そんな御坂をみた麦野は、可哀そうなものを見るような目で御坂を見た。

「何してんだ？あのガキ・・・てか離れろフレンド！くっつくな！ー！てかオレお前のダーリンじゃねえし！ー！馬鹿か！ー！」

「麦野くくく麦野くくく（涙）」

「だあああああああああ！ー！くっつくなあああああああああ  
あああ！ー！ー！」

腰にへばりついて離れないフレンドを離そうとするのだが、馬鹿力か、全然離れない。

どちらも、しばらくそうしていた。

## 第12話 犯人は超電磁砲

お互い、落ち着いたところで、俺たちはやっと戦うことにした。  
さっきまで何してんだオレ・・・カッコ悪

まあ、いいか。今から楽しいお仕事が始まるからな。

「さうて・・・どこをそうグシャグシャにしてやろうかな？可哀そう  
エレクトロマスター  
な電撃使い？」

（こいつ・・・私がレベル5ってことを知らない・・・）

なうんか見たことある顔だなあ・・・？あれだアイツ。あのクソ忌  
々しい第3位。

馬鹿正直に顔写真なんか乗せやがって。

レベル5で写真なんか乗せてんの、削板とクソガキだけだったなあ？  
まあ、そのおかげでいちいち能力なんか見なくていいんだけど・・・  
とっ、その前に・・・

オレはフレンダを見る。

フレンダはビクツと音が付くくらい肩を上がらせた。

そんなことを無視して、オレはフレンダに近寄り、拳を振り上げ・・・  
・・・

こつんと、かなり弱く頭に振り下ろした。

フrendダは力いっぱいされると思ったんだろう、涙目で驚いてこつちを見る。  
オレはため息をついて、侵入者のほうを見る。



「馬鹿か。けが人相手に本気で殴れるか」

「麦野……？」

待て、待て待て。なんか最後に？がついたような気がする。

オレはフレンダをそくとみる・

すると、フレンダが顔を赤らめて体をくねくねさせていた。

おええ……あのクソガキにくつついてる百合の風紀委員ジャッジメントみたいだな……

オレは必死に吐くのを我慢する。吐いたら駄目だ……フレンダが傷つく……だから今のフレンダは見るな。

見たら吐くから。

とっ、とりあえず……

「滝壺。死なない程度に使っとけ」

オレは滝壺に体晶を投げる。

直ぐに滝壺は体晶を使う。

これで、もう相手は地球の裏側に行こうが逃げられない。

オレは向かってきた電撃を曲げ、また原子崩しマルチダウナーを撃つ。

「それにしても、壁に張り付いて逃げ回るなんてなあ……まるでクモみたいだな。クソ野郎」

「こいつ……」

何か言ったかと思えば、相手は気体が入ってる菅を壊してきた。

（何のつもりだあ……？こんなもんじゃ目くらましにしかならねえし、たとえば目くらましだとしても直ぐに晴れる……）

そんなことをしてたら、オレが開けた穴に、侵入者が逃げた。

「麦野。にげたよ」

「あっ！マジだ！！……かといって追いかけるのめんどくさいしなあ……やっぱりここは……」

オレは手を侵入者に向ける。

「『メルトダウナー原子崩し』で跡形もなく消し飛ばすしかないよな」

侵入者に向かって人を跡形もなく溶かす・吹き飛ばすレーザーを発

射する。

「はははは！！！溶けしまえよクソ野郎！！」

「くっ！！」

「あぁん？はずしたか」

チツ、もう少し右にしとけばよかったな。

そう思いながら、オレは歩き始める。

相手はフрендаのおかげでかなり体力も削られてるし傷は負ってる・

・

後は・・・

「逃げられない様に回り込んで・・・じわじわ追いつめるだけか」

「任せてね、麦野。私がんばるから」

「ああ、頼んだぜ滝壺」

さあ、て、哀れな子猫ちゃんはどうするのかにゃん？

今、オレは侵入者で遊んでる。  
だけど、そろそろ飽きてきた。

「なかなか当たんねえな・・・」

「任せて麦野。施設中に仕掛けしまくったから」

「・・・まあ、それもあって相手の体力はドンドン減って行ってる  
な・・・」

もう、オレ一人でも大丈夫か。

そう思って、メルトダウナー原子崩しをまた放つ。

すると、メルトダウナー原子崩しが強制的に曲げられた。

なんでだ・・・？オレの原子崩しを曲げられるエレクトロマスター電撃使いがいるとしたら・・・

レールガン超電磁砲ただ一人

・・・なんだ・・・そういうことかよ・・・

どおりで、クソガキに似てると思ったんだよなあ・・・侵入者は第3位様だったってことかよ・・・

「ふふふ・・・はははははははは！！！！！」

オレは笑う。

フレンダ達が驚いてオレを見てるがどうでもいい。

超電磁砲レールガンがここにいる！！オレは運がいい！！ここなら、アイツを殺せる！！誰にも見られずにだ！！

嗚呼、本当に運がいいなあ・・・それに比べてアイツは運が悪いなあ・・・

今日で、自分の命が無様に終わるんだからな。

「むっ・・・麦野・・・？」

フレンダが心配そうに話しかけてきたが、今のオレの耳には何の音も入らない。

「はははははは！！そうだ！！小娘がオレの上に立つなんてことするからだよお！！立たなかったらオレに殺されることはなかったのになあ・・・今日はさいっこうにいい日だなあ！！！！あはははははははははは！！！！」

「麦野・・・」

とっ、その前に2人を避難させねえとな・・・

「フレンダア！滝壺お！！てめえらはさっさと逃げろ」

「なっなんで！？ 私たちも一緒に・・・！！」

「こいつはオレの獲物だあ！！てめえらは邪魔だ！逃げろ！！」

「・・・分かった」

しぶしぶと、二人は帰っていく。

これでいいんだ・・・滝壺はそろそろ限界が来てるし、フレンドはあの小娘との戦いで怪我をしてる。

オレがアイツらの分までしっかりすれば。

「さあて・・・来ないかねえ？クソ野郎」

もう少しでお前を跡形もなく消してやる！！

## 第12話 犯人は超電磁砲（後書き）

百合<sup>ゆり</sup>・・・女性の同性愛。またはそれに近い近愛のこと。



## 第13話 ぶち殺し

オレは待つ。あのクソガキを殺すために。

ついに、今日であのクソガキをぶち殺せるんだなあ・・・ゾクゾクするぜ

とはいっても、クソガキがなかなか来ない。

何してんだあ？まさか逃げやがったのか？だが、そうとすれば機械を壊してから逃げるはずだ。

やつの目的はそれだけ、それをしない限り帰るとは思えない・・・まだ大きい音がしてないからまだ逃げていないはずだ。

・・・今のうちに足を休めとくかあ・・・

オレはその場に座る。

これから動き回るからな、体力を回復しとかないな。

そう思ったとき、足音が聞こえてきた。

「やあーと来たか。ずいぶん策を練った来たようだな」

ガキの手元を見て、オレの額に青筋が浮かぶ。

フ・レ・ン・ダ〜！！人形を片付けないで帰りやがったのかよ・・・！

後でお仕置が必要みたいだなあ・・・まあ、コイツをぶち殺してからだけだな。

「・・・ほかの2人は？」

「あぁん？」

んだよ、レベル5同士の戦いに仲間を巻き込むとも思ってたのかよクモ女。

オレは立ち上がり、手をポキポキ鳴らす。

「それなら安心しろ。2人は帰らせた。だから一対一で勝負しようじゃねえか。まあ、オレのこの言葉を信じるか信じないかはお前しだいだぜ？常盤台の電撃姫、レベル5の第3位、超電磁砲レベルガンの御坂美琴」

「！！」

ふふ、驚いてる驚いてる。そうだよな？敵に自分の正体がばれてんだからな。

・・・さてと、無駄話も終わりにしようか。

オレは笑う。

すると、クモ女が不思議そうにこっちをみてきた。

「くくく・・・オレは今嬉しいぜ？こっちは年下の、しかもまだケツの青いクソガキが自分より上だってことに怒り続けてたんだ。だからなあ・・・今日でそのクソガキをぶち殺せると思えるとなあ！！嬉しくてたまんねえんだよ！！」

（相手は私の正体を知ってるし、私より下の男・・・一つ下は確か・・・『一原子崩し（メルトダウン）！！』）

「今更オレの正体を知っても無駄だ。お前はこれから死ぬんだからな」

「そう、じゃあ、アンタと話すことは何もないわ・・・ね!！」

ガキはフレンダの人形を投げてきた。

そして、能力で爆発させてきた。

オレは能力を使って爆風を防ぐ。

なるほどねえ・・・アイツの残りの体力も電気も少ないからフレンダの爆弾で補おうってのか・・・  
だがなあ・・・

「それじゃあ、オレに勝てないって言ってるのと同じだぜ？」

「それでもいいわよ」

もう一個投げてきやがった。

フン、こんなもん直ぐに撃ち落して・・・

そう思って、メルトダウンを撃った。

しかし、当たらなかった。人形が逃げたからだ。

「なんだ！？人形に何か仕込んでるのか！？」

オレが驚くと、ガキがにやりと笑ってきやがった。

気に食わねえ・・気に食わねえんだよその顔があ！！

「ええ、操れるようにネジとか入れさせてもらったわ」

「ちいっ！めんどくせえことを・・！！」

何発かメルトダウナーを撃つと、やっと人形を壊せた。

余計な手間かけさせやがって、死ぬのは同じなんだからあがくなよガキ。

「やっぱり1つだと集中できるわよね・・けど、手が回らないくらいあったらどうかしら？」

「！！？」

暗闇から40以上はあるフレンドの爆弾が出てきた。

クソ・・・どれだけ爆弾仕掛けてんだよフレンドわあ！！

動き回る人形をオレはひたすら撃つが、全然当たらない。

・・・・しょうがない、ここはあれを使うか。

オレはポケットに手を入れ、それを出す。

「見たところアイツの能力は弾幕を張れるものじゃない・・・だったら・・・!!」

「数で押せば勝てるってかあ？なあ？そうなのか？」

オレはそれを指で上に跳ね、狙いを定める。  
オレの目線の先には無数の人形・・・うざってえな。

ドンッ！！シュババババツ！！

「!!?」

はは、驚いてる驚いてる。

そうだろうなあ・・・いきなり攻撃が多くなったんだからなあ・・・  
オレはそれを持ち、ガキに見せる。

「シリコンバーン拡散支援半導体。自分の弱点を補うために工夫するのは当然だろうが」

「くっ!!」

ガキは顔をいがませる。

ほらあ。もうあっという間に4，5個だ。

そう思った時、ガキが突然走り出した。

はん! やっぱりガキだなあ!! オイ!!

オレはすぐにガキの直ぐ近くにあった人形を撃つ。

これでもうお前の近くに人形は・・・

そう思った時、ガキの体の後ろから人形が現れた。

(こいつ! 自分の体で見えないようにして・・・だがなあ・・・)

向かってきた人形をオレは曲げる。

「忘れたのかよ!! オレもてめえの能力と似たようなもんだってよ  
お!!」

「・・・!!」

「もしかして勝っちゃったかと思っちゃったかにゃーん?」

俺はじりじりガキに近寄る。

やっと・・やっとコイツをぶち殺せる・・！！

「最初から勝負は決まってたんだよ！超電磁<sup>レールガ</sup>」

ガキの能力を言おうとしたその時、オレの頭に激痛が走り、オレの目の前が暗くなってきた。

「アンタこそ忘れたの？鉄塊しこんだっていつも・・」

ガキの言葉を最後まで聞くことができないまま、オレは意識を手放した。

## 第14話 自分だけは駄目だ

・・・暗い・・・痛い・・・何か思い出せそうな気がする・・・  
なんだろう・・・この映像は・・・

「いて」

そういい、オレは頭に手をやる。  
しかし、そこには何もなかった。たんこぶもだ。なのに、痛みは感じる。なんだよこれは・・・

なんで、死ぬ前の世界にいるんだ？

しかも、今なぜか制服きてるし、鞆もってるし・・・学校いるし・・・  
・なんか周りからみられるし・・・なんなんだよ！これはあ！！

オレは頭を押さえ、必死に考える。  
なんでオレはここにいるんだ！？確かあのクモ女にやられたはずじゃあ・・・



「兄貴！買ってきやしたぜ！昼飯！」

「…………え？」

「え？」

「…………まさかこいつ…………死ぬ前の子分だった西岡じゃねえか！？あれ！？まさかマジでオレ、昔に戻ってるの！？まあ、それは後にしようか。腹減ったからな。」

とっというわけで、前のように屋上で一人昼飯を食ってるオレ。  
・・・懐かしいなあ・・・懐かしいのに昨日のことにように思えて記憶もハッキリ残ってる。

「それはね、君がまだこの世界で生きたかったって思い続けてるからだよ」

そうかそうか、そうなのか。

「あだだだ!! 間接技をしないで!! いくら神様でもこれは痛い!! 痛いって!!」

「やめてほしいのなら、なんでまたいるのか教えやがれこのクソ神」

「教える!! 教えるからやめて!!」

しょうがない、やめるか。

オレはしぶしぶ技をかけるのをやめる。

なんか神様が「骨がぁゝゝ!! ヒビ入ったってゝゝ」とか言いってるけど知らねえ。お前が悪い。  
とりあえず本題に入ろうか。

「でっ? さっきの言葉はどういうことだ? そしてなんでオレはここにいるんだ?」

「いてて・・・そうだね、本題に入ろうか」

・・・さつさとオレの質問に・・・

「答えやがれこのクソ神ー！ー！！叩いて伸ばして捨てるぞゴラァ！！それかスライスするぞボケェ！！」

「ひいひいひい！！？ごっごめんなさい！！・・・じゃ、なくって！・・・貴方はまだ、この世界で生きたかって思ってるです」

「当たり前だろ。誰のせいでポツクリキッカリ死んだと思ってるんだ」

「ぐう・・・私のせいですよ・・・じゃ、なくってえ！！だからずっと記憶に残ってもしるし、昨日のように思えるんです。・・・アナタを殺したのは私です。それは言い訳をするつもりはありません」

「言い訳したら・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だぜ」

「しかし、そうきれいごとを言って、許してもらおうとも思いません。だから、あの時、もう会うのは最後だといった後も、貴方を元の世界に戻す方法を探し続けました」

おおぅ、もうつつこまねえんだな。・・・それほど真剣な話って訳か・・・

「そして、ついに見つけました。今は、貴方に本当にもとの世界に戻るのか聞きにきたんです。元の世界に戻りたいですか？」

「おお！あつたりま・・・え・・・」

オレは声をだんだん小さくしていく。

元の世界に帰れば、オレはまた、あの時のように馬鹿なことをする。それでも、好き放題にして楽しかった。

今の世界で過ごせば、好き放題にはできない、命は危険はある。それなら、元の世界に戻った方がましだ。

でも・・・そうすればどうなる？フレンダ、絹旗、滝壺とは合わなかったことになる。

あの優しいおふくろと親父ともだ・・・

・・・そんなの嫌だ。絶対に嫌だ。あの幸せな時間を忘れたくない。だとしたら、オレの答えは決まってる。

「・・・戻らない」

「・・・本当ですね？今、貴方は重大なことを決めようとしてるんですよ？今、このチャンス逃がせば、もう二度と戻れなくなります。それでもですか？」

「それでもだ！！オレは絶対に帰らねえ！！」

アイツ等を置いて、俺だけが幸せになるのは駄目だ！！仲間ならアイツらと一緒にいて一緒に幸せになるんだ！

このクソ神に甘えるな、自分の力で幸せになれ。自分の力で仲間を護り、幸せにしろ。

「・・・そうですか・・・なら、もういうことはないですね・・・では」

そういうと、ガキは消えた。

これでいいんだ。オレには、ひとりだけ幸せになる資格なんかねえんだ。

人の命をオモチャのようにこの手で消してきたオレになんかに・・・資格はねえ！

そう思った時、頭の痛みがひどくなり、オレの目の前はまた暗くなった。

目の前が明るくなり、見えてきたのは、暗い天井だった。

血が流れている部分を抑え、オレは立ち上がる。

・・・オレがやらなきゃいけない・・・オレがやるんだ・・・たとえばこの身を切り裂かれようと。

## 第15話 逃げられたけど・・・

「痛エ・・・痛えなチクショウ・・・」

斬れた部分を抑えながら、言う。

徐々にオレの怒りは上がっていく。

あつ、駄目だこれ。もうキレてもいいよな？ いいよな？

そう思いながら、壁まで移動する。

（あのクソガキィ・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だ  
なあ・・・）

イライラしながらガキを待つ。すると、大きな爆発音がした。

（・・・ガキが中心部分を破壊したのか・・・）

だと、したら。帰るにはここを通らねえといけねえ。待ってれば絶対  
対にここに来る。・・・そうだなあ、アイツの後ろから近付いてメ  
ルトダウンーぶっ放して体に穴開けてやろう。  
ギャハッ！どれだけ血が噴き出るかなあ♪

タッタッタッ

おっと、来たみたいだな。

そう思った時、急に頭の痛みがひどくなり、先ほどのことを思い出す。

そうだったなあ・・・あのガキ、オレに血を流させやがったんだよなあ・・・殺す。

オレは、オレが居ないことに驚いてるガキの後ろにそっと近寄り、撃つ準備をし、撃った。

ドンッ！！！！

「!?!?」

へえ・・・とっさに体をひねってかわしたか・・・だけど、隙だらけだぜ。

オレはガキの腹に思いっきり蹴りを入れる。

防ぐことができなかったガキの腹に足が食い込む、ガキは吹っ飛ぶ。地面に落ちると、苦しそうにのたうちまわり始めるのをみて、オレは思う。

(こんなクソガキがオレより上で、オレが下あ?・・・なめてんのかよ。こいつ)

オレは頭を抑え、ガキに近づいていく。

もう、オレの怒りはMaxなんだよなあ・・・

「おいおい、のんびり寝てんじゃねえよ。今から、オレがやられた分をテメーに兆倍にして返すんだからよお!!!! 無様に逃げ回って死ねええええええええ!!!!」

「!?!」

至近距離のメルトダウンをよけやがったな。なるほどお、すばし



っこいやつだなあ・・・  
能力を使い、壁から壁へ飛び移るガキに、オレは怒りを思いつきり吐き出す。

「おいおいクソガキイ！！逃げてんじゃねえよおおおおお！！！！さっきまでの勢いはどこに行きやがったああああ！！オレより上のくせに、ケツ見せながら逃げんじゃねえよ！！第3位の名が泣くぞお！！！！ちつとは第3位の根性を見せやがれええええええええ！！！！」

（そんなもん、勝手に泣かせとけばいいのよ！さっさと逃げ・・・）

逃げようと、向きを変えるガキ。

おいおい、逃げられるとも思ってたのかよクモ女。まさか、一つ下だからって甘く見てねえよなあ？なあ？なあ！！？

「なめてたら直ぐにぶっ殺すぞクソガキイイイイイイ！！！！」

（別になめてないっつーのに・・・）

「ケツふりまきやがって・・・テメーはクモじゃなくてゴキブリだったのかよ！だったらそれらしくプチっと」

プルルル・・・プルルル・・・

チツ、いいところで邪魔しやがって。

電話に出ると、絹旗だった。どうやらオレの読みが当たったらしいなあ・・・

「ああん？どうすればいいかあ？もう言った通りに進めとけよ。今こっちはいいところなんだからよお！！あつ、フレンダに伝言頼めるかあ？そうそう、伝言だよ伝言。お・し・お・き・か・く・て・い・だなつて伝えとけ。あばよ」

要件を伝え終わると、オレは遊びに集中する。

それにしてもあのがきちよろちよろと逃げ回るなあ・・・

そう思いながら、オレはガキの跡を追いかける。

じわじわ追いつめていくと、ガキは逃げる場所がない廊下を渡り始めた。

「はあっ・・・はあっ・・・しつこい男ね・・・」

「だあれがしつこいってえ？」

「！！？グフツ！！」

腕でふさごうとしたみたいだが無駄だぜ。男の力にかなうわけねえだろおが。

「それにしても、こんないかにも殺してくださいって場所に逃げやがって・・・とうとう頭がいかれたかあ？それなら最後に根性出し

てレールガンの一発で撃ってくれねえかなあ!!? ギャハハハハハハ!!」

「ふふ・・・あはは・・・」

「ハハハ・・・あん？」

コイツ、なに笑ってやがる。

もしかして本当に頭がいかれちゃったのかあ? だとしたら面白くねえな。

「おいおい、いたぶる前にいかれちゃったら面白くねえぞ」

「ははは・・・そうね、今の私にはレールガンを一発撃つこともできないわ・・・でもね、貴方の仲間の仕掛けを作動することなら、今の私にもできるわ」

「仕掛け・・・?・・・!!?」

フレンダの・・・

慌ててオレは足元を見る。すると、そこらじゅうにフレンダの仕掛けがしてあった。

おい・・・まさか・・・

「ああ、最後に言っておくわ。あなた、笑ってる方がいいわよ」

「？」

何か意味が分からないことを言い、線に火花をつける。  
一気に足場が斬れて、落ちていく。

「くそっ・・・！！」

メルトダウナーを撃とうと考えたとき、ガキが太い、丈夫そうな線を投げてきた。

「捕まって！！」

・・・馬鹿だなあ・・・第3位に命を助けられたのが知られたら、死ぬのよりつらいんだよ！！

オレは線を弾き飛ばし、下に落ち続ける。

だけど、オレは死ぬ気はねえ。メルトダウナーで落ちるスピードを殺すんだ！！

オレは下を向き、手からメルトダウナーを撃ち、スピードを緩める。  
しかし、これくらいじゃあ、そんなゆっくりなスピードにはならない。あとは自分で何とか着地だ。

地面が見えたとき、オレは体制を整え、着地する。

ゴンッ!!

「イテ!!」

左ひざをすった。だけど、あの高さからこれだけの傷だから奇跡だな。後は・・・  
オレは上に向かってメルトダウンを撃つ。

「降りてこいよクソガキ!!」まだ勝負はついてねえぞおおおおお  
おお!!!!」

そう叫び、撃ちまくるが、足音が遠のいてくるのを聞いて、ガキが逃げたのを知る。

分かった途端、オレはなんでガキが居たのか気になり始めた。

「クソ・・・てか、なんで「光」の世界のガキがこんなことしてんだ・・・？」

そう思い始めたとき、運よく、パソコンを持った研究者3人が通った。

3人のうち2人は普通の体型でさっさと行ってしまう。それにくらべて1人はデブで、歩くのが遅い。

とうとう、2人は1人を置いて先に言ってしまった。

これは・・・チャンスじゃん!!

「はぁ・・・はぁ・・・くそ！組織を雇ったから大丈夫って話じゃなかったのかよ！！まったく役に立たな」

「止まれデブ」

「!!?」

オレは片手でデブを後ろに投げ飛ばす。  
デブは壁にぶつかるが、そんなことどうでもいい。

「なっ・・・なんなんだよ!! お前！」

「うるさい。オレの質問だけに答えろ」

「なんでお前の言うことなんか!! ぐっ!!」

オレは襟元を掴み、片手でデブを持ち上げる。  
いちいちうるせえデブだなぁ・・・オレの質問にだけ答えろよ。オレに従え。

「・・・この研究所の実験について興味が出た。見せろ」

オレは伏せ目で、デブに言う。

すると、デブはなぜか少し顔を赤らめた。

気持ち悪い・・・吐き気がする。

しかし、すぐに元の顔に戻り、喋り始める。

「馬鹿いうな！！そんなことすればオレが殺されグフツ！！」

「今ここで脂肪だらけの肉塊になると、残りのチャンスにかけて逃亡生活を送るのと、どっちがいいんだ？オイ。豚よお」

「ひいっ・・・ひいい！！分かった！見せる！！」

「チッ、最初からそう言っただよよかったんだよ」

オレはデブを乱暴に地面に落とし、さっさとしろとせかす。

ついたと言い、パソコンを渡され、オレは中身を読み、口を吊り上げ、笑う。

「ギャハハハッ！！なんだよ第1位様はこんなことやられてんのかよ！！スライムプチプチ殺してレベル6につてかぁ！？笑える話だねえこりゃ！」

次々に読んでいく。

おもしろいなあ・・・いっちょ、邪魔してやろうか。



「だいたい上も何考えてんだか……」

そこまで言って言葉が止まった。

クローンはあのクソガキのクローン。そして、今クソガキは必死にこの計画を止めている。

たとえば、ツリーダイヤル樹形図の設計者が破壊されても、計画はやめない……。だとしたら、ガキには何もできねえなあ。自分の命を使えば止まるけど。

まっ、これなら放っておいた方が苦しみそうだな。

どうせなら、この計画が成功して、「闇」に落ちればいいのによ・  
・

「『闇』の奥深く、暗黒までな♪」

オレはデブにパソコンを返すと、歩き出す。

ああ、忘れていた。

後ろを向き、手をデブに向ける。

デブは慌てて逃げようとするが、遅い。

「ばいばい。おデブさん。お前の人生はみじめな死に方で終わる」

「約束がちがうじゃないk」

ドンッ！！

「あーん？アハッ♪まさか本当にオレのこと信じてたのかよ。馬鹿じゃねえの？」「闇」の人間のこと、簡単に信じるなよ」

そういい、オレはフレンダ達のもとへ向かう。

## 第16話 恋したことありませんが何か？問題でも？

オレは今、フレンダにお仕置きをしている。

アハハ、関節技って便利だね〜

「痛い！！痛いって訳よ麦野！！」

「ん〜、今日の晩御飯はどうしよっかな〜」

「ごめんなさああああいい！！もう二度としないって訳よおおおお！！」

「そろそろ疲れたからやめる」

ゴキッ

「ぶー！！」

オレに首をゴツキンやられたフレンダは真っ白になって床にパタンと倒れる。

なんか、口から魂抜けかけだな。

結局、あの後帰ってきたオレは冷蔵庫に何もなかったことを思い出

し、適当に買ってアイテム全員が生活してる家に帰ってきた。  
そして、冷蔵庫に食材を入れた後、フレンダのお仕置きタイムが始  
まったわけだ。

・・・とりあえず晩御飯のメニューを考えないとな・・・

「よし。お前らは何が食いたいんだ？」

こうなったら最後の手段、皆から意見を聞いて作る。

ここで問題なのは意見がバラバラになることだ。まあ、今はフレン  
ダが居ないから意見は二つしか出ないけどな。

「今、超カレーが食べたいです」

「私はハヤシライスがいいな」

「見事に別れたねお前ら二人。じゃあしょうがない。今日はシヤケ  
にしよう。明日はカレー、あさってはハヤシライスだな」

なんだか急にシヤケの塩焼きが食いたくなってきた。

もう意見とかどうでもいいや。

すると、絹旗が思った通り文句を言ってきた。

「ちよっ！！意見を超無視してるじゃないですか！！」

「いいんだよ！オレに指図すんじゃないやねえよ！飯作ってんのオレだか

らオレが決める！文句があるなら食うんじゃねえ！！」

「私、もうなんでもいいから食べたい。おなかすいた」

「見ろ！！絹旗！滝壺を見習え。何も文句いわないだろ」

「いや、ただ超どうでもよくなったからですよ」

「・・・同じだ」

「超違います」

ええい！五月蠅いやつめ！！こうなったら絹旗のシヤケに塩たっぷりふってマヨネーズとからしかけてやる！

「あつ、何か変もの入れたりかけたりしないでくださいよ」

「チッ」

見抜かれてた。

（（そりゃ、毎回毎回してたらね））

「うううゝ・・・痛いって訳よ・・・」

「うるさい。いつも役に立たないんだから今役に立て」

「結局、私の扱いが酷いって訳よ」

「気のせいだろ」

フレンダをたたき起こして晩御飯の手伝いをさせる。  
服は汚れたら嫌だからエプロンは必ずつけてる。

そういや、最初、フレンダ達の前でエプロンつけたとき、なぜか滝壺以外は頬を赤くしてたな・・・オレ、なんかしたか？

「麦野！！こげてるこげてるって訳よ！！」

「うおっ！！？」

余計なことを考えてたら少ししゃけが焦げた。すまない、しゃけ。この焦げたのはフレンダに食わせそう。

「・・・麦野」

「ん？なんだ？」

オレはさらにシャケやサラダを盛り付けながら返事をする。また変なこと言い出すのか？

そう思いながら、喉が渴いたのでお茶を飲む。

そしたら、予想を超えた質問をしてきた。

「麦野ってさ。恋とか付き合ったこととかあるの？」

「・・・・・・・・ぶふおっ！！！」

オレは口に入ってたお茶を吹き出した。

かろうじて顔の方向を変えたから飯にはかからなかった。

それよりも・・・・・・・・いきなりなんつーこというんだフレンド。あまりのことに吹き出したじゃねえか。

「やっぱり麦野ほどの人だからあるよね？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・麦野？」

そんなフレンドの声などオレの頭に入ってくるわけなかった。



俺って、恋したことってあるっけ？

いや、待て待て、一回くらいはあるはずだ！よく思い出せ！！

オレは必死に記憶をほじくりだす。だけど、出てこない。

覚えがあるのは、「あっ、あの人綺麗だな」くらいしか出てこない。  
・・・オレ、青春時代に何してたんだよ。暴れまくってただけじゃ  
ねえか。

「まさか麦野・・・恋したことないの・・・？」

「・・・うん、そうだね。さて、フレンダのご飯はなしか」

「なんでそうなるって訳よ！！？」

なんで？オレが鈍感なの？それともただ馬鹿だったから？えっ？え  
っ？えっ？

オレの頭の中は恋のことについてでいっぱいになる。  
その間に3人が話していたことを聞いていなかった。

「麦野、恋したことないらしいって訳よ！」

「超チャンスですね。私は麦野の初めての恋人になってそのまま結

婚です」

「いやいや、それはないわね。結局、麦野は私のとりこって訳よ！  
」

「二人とも、がんばってね」

オレはただ必死に考える。

「恋恋恋恋恋・・・相手を好きになるってどういうことだ？ん？？  
？？」

胸がドキドキする？ドキドキ？なにそれ（笑）

てか、オレ恋とかそういうの興味ないんですけど（笑）  
誰だ？鈍感リア充って言ったの。

## 第17話　なんでみれるんだよ!!

後日、絹旗が変なDVD持ってきた。

「恋愛したことがない麦野にも、これを見れば超一発で恋愛がどういうことか分かりますよ」

「? 絹旗たちはあるのか?」

オレがそういうと、横からフレンダが入り込んできて、ない胸をはる。

「私はあるよ! この脚線美に惚れた男がうじゃうじゃと・・・」

「まあ、つまりは、足に惚れただけで顔とか性格で惚れたわけじゃないって訳だな」

「ひどいって訳よ!!」

「オレ、思ったことそのまま口にでちまうんだよ。悪気はな・・・あ

る！」

「あるの！！？」

フレンダが涙目でオレの肩を掴み、がくがくと揺らしてくる。やめろ、酔う、吐く！

「絹旗はあるの？」

「ええ、もちろんありますよ！5回付き合いました。それに、私は映画やDVDで見えますから恋愛がどういうものか超分かってますよ！」

フレンダに比べてはあるが、それでもない胸を張る。

「二人ともアイテムの中じゃ、貧乳担当だな」

つい、本音がぽろつとでた。すると、その言葉を聞いた二人は落ち込んだ、が、すぐに復活した。

いつも言ってるからな・・・これぐらいじゃ気にしなくなってきたのか・・・

そう思ってるうちに、絹旗がDVDを見る準備をし始めた。

仕方がない、正直、恋愛がこういうものかさっぱり分からないのでみどころ。

「滝壺ー。飲み物入れにいくぞ」

「うん。二人は何がいい？」

「私はコーラで」

「私はサバか」「飲み物だって言ってんだろ絶壁・つるぺた小娘」・・・  
「じゃあメロン・・・」

滝壺とオレがキッチンへ向かい、飲み物を入れ始める。

おかわりもできるように入れものに入れて、それも持って行ってフカフカのソファに座る。

準備OKなのを確認すると、絹旗は再生ボタンを押した。

最初は映画の宣伝が長い間流れた。それでも、早送りはしない。もしかしたら宣伝の中にいい映画の宣伝があるかもしれないからだ。

そう考えながら、コップに口をつけ、中に入っているコーヒーを飲んでいく。

暫くして、やっと映画が始まる合図になった。そう思いながらもオレはコーヒーを飲み続ける。

ふと、足元に落ちていたDVDの入れ物を見つけ、どんな恋愛物語なのか説明を読もうとした、だけど、ある文字により、オレの動きは止まった。

『18禁』

「・・・え?。」

その時、エロっぽい声がテレビから聞こえてきた。オレはそろそろと画面に目を向ける。

すると、画面には裸の女の体を、同じく裸の男が触っている映像・

・  
・  
・

その映像を見た瞬間、オレは顔が熱くなり、とっさに叫んだ。

[illegible]

ガンツ  
バシヤツ  
バキイツ  
バサツ

「くくく!! ちょっと・・・耳元でなんて超大声だしてるん・・・です・・・か・・・?」

「む・・・麦野・・・?」

「大丈夫? 耳真っ赤だよ?」

「なっとなななっなんでお前らはそんな普通でいるんだよ!! ありえねえ!! ありえねえだろ!!?」

クツションで顔ををかくして画面を見ない様にしながらそう叫ぶ。  
あー!! なんだよはじめから!! なんだよ今の!!? なんだよ  
お前ら! 18禁のやつを18歳じゃないお前らがなんで普通に見  
ているんだよ!! おかしいだろ!!

顔が熱い!! 絶対今のオレ、顔も耳も真っ赤だぞ!! 心臓もバクバクする!!

そんなオレを見て、3人は分かったのだろう。オレが初<sup>う</sup>心<sup>ふ</sup>なことに。



〃  
〃  
〃 3人称  
〃  
〃

3人は衝撃を受けていた。

（（（麦野は（超）純粹だ！！）））

そう分かると、絹旗とフレンダは喜ぶ。

（そうだったら・・・私が麦野と（超）初めてになれる・・・！  
！）

「？」

麦野のことを綺麗だと思いながらも仲間以上、恋人未満にしか思っていない滝壺は頬を染めている二人をみて不思議に思っていた。

そんな滝壺をほっというて、二人は興奮しはじめる。

その間にも、麦野は赤い顔をかくして、普通に見ていた3人に向けてまだブツブツ文句をいていた。

## 第18話 無事でいれるとおもうなよ

結局、麦野は少ししかみず、クッションで顔をかくしていた。

その反応を見て、フレンダと絹旗はにやにやする。滝壺はいつの間にか寝ていた。

「麦野って純粹なんだねー♪まあ結局、それもツボに入るけどね♪」

「うう・・・ん？なんのツボにだ？てかどうやって純粹をツボに入れるんだよ」

「え！？あっ・・・あうあゝ・・・気にしないで今のは！！結局、ただの言葉の間違いつて訳よ！」

必死にごまかす。普通なら怪しまれて問い詰められたりするのだが、今の麦野にはそんな余裕がなかった。なぜなら、視界にテレビが入ったからである。またもや顔を真っ赤にして顔をかくす。

フレンダはそれを見て顔をにやけさせる。

（麦野、超可愛いつて訳よ！ああ・・・これが私の彼氏？）

（何言ってるんですか！？私ですよ！寝言にしては目が開きすぎですし呆れますね）

（ちよっ！酷いつて訳よ！！まっ、結局は私にとられるのを恐れて言ってるんでしょ？分かってるんだから！）

（だから寝言にしては面白いを通りこして馬鹿だと言っててるんですよ）

（なっ！！なんだとーーーー！！？絹旗のくせにーーーー！！）

（そっちこそなんです！フレンドのくせにーーーー！！おもてに出てください！！）

（望むところ！！）

お互い、一步も譲らずに外に飛び出る。音で麦野に見つかってはいけないので、二人だけで戦っても聞こえないところまで移動する。それを、寝ぼけながら滝壺は見ていたが、すぐに夢の中に入っていた。

「準備はいいかしら？ 私は準備OKよ」

「こっちも超OKですよ」

二人は能力は使わない喧嘩にすることにした。

しかし、二人の喧嘩の条件は殴る蹴る投げ飛ばすなどがOKの不良の喧嘩だ。当然、顔面だって有りなのだ。

「じゃあ、数えるよ。一、二、三！！！」

三で二人は地面をけり、とびかかる。

そこからはすごかった。腹を蹴る、顔面を殴る、とび蹴りをくらわす。直ぐに二人の体にはあざやこぶ、血などがついてくる。

それでも、降参などと言わない、負けるのはどちらが気絶した時なのだ。

長い間、二人は勝負をする。

そんな時、裏路地から出てきた青年に、絹旗にくらわそうとして出

したフレンダの拳が、青年の顔にめり込んだ。

ドゴッ

「ぐふっ・・・テメー・・・」

「「あっ」」

二人は動きを止める。青年の口は斬れ、血が出ていた。そして、次の瞬間、少年の背中からは翼が生えた。

「なっ!!」

「能力者!!!?!」

恐怖のあまり、動けない二人。そんな二人に青年はじりじりと近寄る。

「オレを殴るとはいいい度胸じゃねえか・・・ムカついた。殺す」

「ひっ!ゲフッ!!」

思いっきり腹をけられ、フレンダは壁にぶつかる。

直ぐに絹旗が助けようと近づいたが、顔面に向かって、何か装具が付いた拳が飛んできた。

能力を使って防ごうとしたが、顔面に強烈な痛みが走り、飛ばされる。

「なんだあ？お前、皮膚を固くする能力者か？まあ、オレの前じゃあ意味ねえどな！！」

青年はフレンダと絹旗に向かって能力で作り出した鉄骨を投げた。

「麦野。たいへんだよ麦野」

「うん？」

まだ顔を少し赤くしたまま、麦野は返事をした。まだ気づいていないらしい。

「フрендаと絹旗がピンチだよ」

「!!?!?どこだ!!?!?」

立ち上がり、ドアに手を開ける。

それを見た滝壺はあるものを取り出す。

「麦野。正体がばれたらいけないから。これ」

「滝壺・・・!!?もつとましのないの?」

感動しかけ、渡されたものを見て、涙が引っ込んだ。

渡されたのはカーニバルにつけそうな派手な仮面だった。

「なんでこんなもんもってんだ?」そう思ったが、ふざけている暇はないので、それを付けた。



「行くぞ!!」

「うん、任せて」

二人は走り出す。

一方、フレンダと絹旗は作り出された鉄骨を体の近くに動けないに刺され、動けないでいた。  
青年はまだイラつきが収まらないのか、次は何をしようかと考えていた。

「ちっ、まだ傷口がうずきやがる・・・ムカつくなあ・・・どうやって殺してやろうか」

「くうう・・・」

「ああ、そうだ。頭を割ってやろうか。おもしろそうだな」

そういい、手を近づける。死を覚悟して、フレンドは目を閉じた。

（ごめんね・・・麦野・・・！！）

悪魔の手が後少しで自分の頭に触れる、そう思った時、目の前が明るくなった。

（え？）

いきなり日が昇ったなんてことはありえない。フレンドはおそろおそろ目を開けた。すると、目の前には恋をしている、頼れるリーダーがいた。

「デメー・・・オレの仲間到手えだして無事でいられると思うなよ・・・」

そういう麦野の目は、怒りで燃えていた。

## 第19話 オレを先に殺せ（前書き）

作者はここから原作を知らないのです。

なので、ここからは原作とは全然違う話になります。

小説を買う金なんかワシにあると思うな！

## 第19話 オレを先に殺せ

直ぐにオレは、茶髪の男に向かってメルトダウンを撃つ。  
だけど、背中から生えた天使のような6枚の翼で塞がれた。  
なんだよ、あの翼・・・

「へえ、なかなかの威力だなあ」

男は余裕そうに言う。

少しオレはムカツとする。余裕荘に言いやがって・・・  
だけど、まだ本気で撃ったわけじゃねえが・・・メルトダウンを  
防ぐとはな・・・同じ超能力者か？

そんなことを思っていると、相手も同じことを思っていたらしい。

「この威力。レベル4じゃ到底無理だな。お前、超能力者だろ」

「・・・そうだ。そっちもだろ？超能力者の能力を防げるのなんて、  
同じ超能力者しかないからな」

「同じ・・・ははっ!!」

敵が笑う。なんだよ、間違っちゃいないはずだ。それとも、超能力者の中でも圧倒的な力をもってるのか？だとしたら・・・

オレの頭に、レベル5たちの能力が頭に浮かんた。

レベル5の中でも圧倒的な力をもってるのは・・・まさか・・・

「そうだな。同じレベル5だけど、力は全然違う。オレは第2位、ダークマター未元物質。垣根かきね 帝督ていとくつつうんだ。死ぬまで覚えてろよ。まあ、つつても。直ぐに死ぬけどな」

「つつ!!」

翼がさっきまでオレが居た場所を抉り取る。

おいおい・・・マジかよ、第2位とか・・・こんなの、あの方法しか勝ち目がひとかけらもねえじゃねえか！  
くそっ、先にフレンダと絹旗をどうにかしねえと!!

「オイ! 滝!! 金髪とチビをどっか遠くまで連れてけ!!」

「むg・・・分かった」

オレの言葉で気づいた滝壺は、名前を呼ぶのを途中でやめる。  
もしコイツの仲間が近くにいて、俺たちの名前を聞いてアイテムだ

ってことが分かれれば・・・絶対に後で襲撃にくる。たとえその襲撃を防いでも、追い掛け回してくるだろ。そうなれば、俺たちは死ぬまで逃亡生活をおくらないといけない。

（んなことは駄目だ。まだフレンダ達にはやりたいことだったくさんある）

自分を犠牲にしてもコイツを殺さないといけない。

長期戦になればオレが圧倒的に不利だ。だったら・・・

（・・・使うしかねえか・・・あの方法・・・メルトダウンナーの最大出力を・・・）

オレはあのクソ神のことに言われたことを思い出す。

アイツはずっと前、これで会うのは最後だと言ったとき、間違えて殺した償いとして、本来なら、体や腕が吹き飛ぶほどの出力を出しても、大丈夫なようにするって言っていた。

それは検査しても分からねエものらしく、研究者どもも最大出力をすれば体が吹き飛ぶって言ってやがった。

今まで恐くて安全内から出たことはねえが・・・仲間を助けるためだ。最大出力でこいつを吹き飛ばす！

オレは手を垣根に向ける。

垣根はまたさっきと同じメルトダウンナーだと思ったのか、笑う。

「はっ！お前、超能力者のくせに頭悪いな！！そんなものいくらオレに撃っても無駄なんだよ！！」

「そんなこと分かってるぜ・・・だから変えたんだよ・・・」

「何をだ？さっきと変わらねえじゃねえか・・・？」

やっと気づいたようだ。そう思いながらもオレはいつもより複雑な演算をする。

恐い・・・自分が死んじまうかもしれないことが恐い。けど、仲間が全員死ぬより・・・オレ一人が死んだ方がましだ！！

決意し、吹き飛ばされない様にオレは足に力を入れる。

「嘘だろ・・・！？こんなの撃ったら体が吹き飛んじまうぞ！テメエ、死ぬ気か！？」

「うるせえ！！」

「！！？」

垣根は目を見開いてオレを見る。

「仲間のために・・・リーダーが体を張るのは当然じゃねえか・・・こいつらを逃がせるんなら、死んだってかまわねえんだよ」



「・・・麦野・・・」

滝壺が鉄骨を取り除いてる間、ぽつりとフレンダがオレの名前を言う。

その名前を聞いて、垣根はようやくオレが誰なのか気づいたようだ。

「麦野・・・？ 仮面野郎、お前、第4位か！」

「死ぬ前に分かってよかったなあ！！ ブチコロシ確定だクソ野郎！！」

オレは最大出力のメルトダウンナーを放つ。予想をはるかに超えた威力で、オレの視界はメルトダウンナーで見えなくなる。

体は痛くもねえ、ただ、吹き飛ばされそうになる。それでも、必死にふんばる。

実際は10秒間だけだったが、オレには長い時間に思えた。踏ん張ったせいで足が震える。

やべえ・・・立ってられねえ・・・

オレはその場で膝をつき、汗を流す。

この汗は恐怖の汗だろう。次に撃つときは踏ん張ったせいでの汗になって、流す量もすこしになっているはずだ。

「あの・・・野郎は・・・？」

死んだ？ そうだったらいいのにな。期待しながら顔をあげる。しかし、期待は裏切られた。

垣根は、オレから見て左側の翼が、オレのメルトダウンで消えただけで、無傷だった。

「・・・すごい威力だな・・・けど、残念だったな。オレには当たらなかった。今のお前の状態を見れば、もうお前は動けないだろ？」

「くっ・・・！」

その通りだ・・・もうオレは動けねえ・・・

垣根が余裕そうにオレに歩いて近づいてくる。チクショウ・・・ムカつくんだよ・・・その余裕が！！

「余裕そうにオレの相手をするのが・・・ムカつくんだよ・・・気に入らねえんだよ！！」

「ああ？ だったらそれはお前に殺されたやつらも思ってたはずだぜ？ なんせお前は歩きながら撃つだけだ。さぞムカついただろうな」

「うるせえ！！ 敵のことなんかどうでもいいんだよオ！！ オレと仲間さえよかったらそれでいいんだよおおおお！！！！」

普通のメルトダウンを撃ちまくる。だけど、そんなの垣根の翼で塞がれる。無駄な抵抗だ。

チクショウ・・・こんなクソ野郎に・・・！

「オレのことムカついてんだろ？安心しろ、オレも第4位のお前程度に翼を消し飛ばされたのにムカついてるから・・・なあ！！」

「がっ！！」

「麦野！！」

腹を思いつき蹴られ、いろいろなものにぶつかりながら壁にぶつかる。吐きそうになったが必死に耐える。そんな状態の時に、またもや腹をけられ、違う壁まで吹っ飛び、オレは地面にうつぶせになる。

壁にぶつかるまでにいろんなものにぶつかったため、滝壺が渡してきた仮面は壊れてとれた。

「麦野！！もうやめてっ！！麦野だけ助けて！！」

「駄目なら・・・せめて私たちを超先に・・・」

「そういわれたら、先にこっちを先に殺したくなるな」

「麦野・・・！やめて・・・」

「うるせえな・・・望み通り先に殺してから、コイツをじっくりいたぶってやるよ」

そう聞き、身構える3人。時間を稼ごうとしているみたいだ。だけど、オレより先に3人が死ぬのなんて許さない・・・オレを殺してからにしろよクソ野郎！！3人が殺される姿を想像して、オレは涙を流す。そして、悲鳴を上げる体に鞭をうち、立ち上がり、メルトダウナーを撃つ。

「あっ？動けたのかよ。しぶとい野郎だ」

そういい、残った翼で防ぐ。垣根の視界が翼で隠れた瞬間、オレは垣根の腹に突っ込んだ。

来るとは思っていなかったのだろう、翼で防げず、垣根は地面に倒れる。

当然、上半身を起こし垣根は動けず、自分の腰にいるオレに怒り、フレンダ達の首に翼を当てる。

フレンダ達は恐怖で動けなくなる。

「・・・！クソがあ！！こいつらを殺されたくないんだったら動くんじゃないええ！！」

「・・・ブ・・・チコロシ・・・確定だっ・・・つつたろ・・・聞こえてなかった・・・のかよ・・・第2位・・・」

垣根を睨もうと、オレは必死に顔をあげる。そう強気でいっても、もうオレにはメルトダウナーを一発撃つことすらできない。垣根は怒鳴る。

「ああ!!? 馬鹿にしてやがんの・・・か・・・y・・・」

「・・・?」

オレの顔を見て、垣根の声は小さくなり、消えた。今のうちにコイツから離れようと体に力をいれるが、体が持ち上がらない。

フレンダ達が逃げてとか言ってやがるが・・・もう無理みたいだな・・・

諦めて顔を下げようとしたとき、オレは肩を掴まれ、押され、垣根の足の中で、女のように正座を崩した恰好になった。

その恰好のまま、垣根は長いことオレの顔を見ていた。

なっ、なんだ? 怒りすぎて頭おかしくなっちゃったのか?

そんなふざけたことを思っていると、垣根が突然「うん」と、首を縦にふり、思いもなかった言葉を言った。

「オレ、お前に惚れた」

「「「・・・はあ!!?」」」」

フレンダ達とオレの声が見事に重なった。

当然、オレは混乱して何がなんだか分からなくなる。

第2位は本当に頭がおかしくなったようだ。



## 第20話 本当に病院行かなくていいのか？

垣根以外の俺たちはピタッと動きを止める。  
暫くしてようやく出てきた言葉はとても震えていた。

「・・・ん？空耳？空耳か？それとも幻聴か？え？」

第2位がオレに惚れたって・・・嘘だろ？嘘だろ？嘘だよな？なあ？  
だいたい、コイツオレのこと女って思っていないだろうな、いや、それはないか。さっきの戦いで大分服がボロボロだし。まあ、一応聞いておくか・・・もし女だって言ったら殺そう。オレ気にしてんだぞ。

「おい、聞いてんのか？」

「えっ・・・ああ・・・お前、それ本気か？オレは男だぞ？」

「？本気だし男ってことくらい分かってるぜ。オレのことなめてんのか」

こいつ・・・本気だ！！早く病院行かないといけないんじゃないのか・・・？

「・・・敵にこんなことというのは変かもしれないが・・・病院行くか？」

「すんごい傷ついた」

その言葉を聞いて、オレはマジで本気だとわかる。だけど・・・認めたくねえ！！！！オレは同性愛なんで興味ねえしされたくもねえ！！

てか、こいつホントに病院連れて行かなくていいの！？頭大丈夫かよ！！？

失礼なこと考えてると、フレンダ達が垣根からオレを引き離した。  
Niceだ！お前たち！

正直、オレは先ほどの戦いのせいで体が動かせない。フレンダ達はコイツから引き離さなかったらオレはずっとコイツの足の中にで座ることになった。

「麦野。超大丈夫ですか！？」

「血まみれだよ・・・」

心配そうにオレの体を気遣ってくれる絹旗と滝壺。いつもは変なことばかりする奴だとおもってたけど・・・いいやつじゃねえか！



あつ、目から水が出てきそう。

しかし、フレンダは違うことを考えて顔を暗くしていた。

「・・・フレンダ。どうしたんだ？」

「麦野・・・私・・・私・・・って・・・駄目だね・・・うつ・・・  
ぐすっ・・・」

「!! 何で泣くんのだ!?! オレなんかした!?!」

オレの顔恐かった? そんなこと考えたけど、フレンダは違うことを  
考えていたみたいだ。

「違うの・・・だって・・・私が喧嘩したりしなかったら・・・麦  
野は傷つかなかったのに・・・結局・・・全部私のせいって訳よ・・・  
」

それをきいて、一緒に喧嘩をした絹旗も顔を暗くする。

それを見てオレは大げさにため息をつく。おいおい、せっかく生きて  
んのに、そんなことどうでもいいじゃねえか。

オレは二人の頭をくしゃくしゃとなでる。当然、二人は涙を流しな  
がら驚く。

「馬鹿だな。お前ら。オレは生きてんだから、もうどうでもいいだろ？それにな、二人が悲しんでる姿を見る方がオレにはつらい。だからほらっ、さっさと涙止めて帰ろうぜ（頭おかしい人はおいて）」

「麦野・・・うん」

「あれ？オレのこと無視してない？おい、おい」

何も聞こえない。幻聴だ。

二人は涙をふき、強い目になる。よしっ、大丈夫だな。

「さーて、行こうか」

そういい、オレは立ち上がろうと足に力を入れる、しかし、さっきも言ったように、先ほどの戦いのせいで動くことはできない、立ち上がる力も残っていない。体中の傷も痛い。

かといって、ここから家まで結構距離がある・・・年端のいかない女のフレンダ達が男のオレを家まで運ぶのはきついだろうし・・・どうしようか・・・

そんなことを考えてると、ふわっと体を持ち上げられた。体中についた傷に触れられ、激痛が走り、オレは涙目になる。すると、オレを持ち上げたやつが口を開いた。

「おっ、涙目♪」

「・・・えっ?・・・／／／!?!?」

持ち上げた奴の顔をみて、オレは固まり、そして顔を赤らめる。

当然、皆も分かっているだろうが、今、オレを持ち上げたのは先ほど爆弾発言をした垣根だ。

当然、オレは混乱する。混乱し過ぎて実況が出来なので実況を変えようと思う。パス!

はいはい

～三人称～

麦野は先ほどまで敵だった垣根にお姫様抱っこされていることが分  
かり、焦る。

「ばっ！おろせゴラァ！何女みたいにオレを持ってんだボケェ！！」

恥ずかしい恰好をやめさせようと、暴言を浴びせる。第2位に抱っ  
こされるのは屈辱だったし、なにより、彼の中では、お姫様抱っこ  
は女子だけにするものだと思っていた。なので、自分がそれをされ、  
女扱いされているのが恥ずかしかった。しかし、垣根は全然離さな  
い。

赤くなっている麦野を見てにやにやと笑っている。その笑顔を見て、  
麦野の頭の中で、垣根＝変態という方程式が立った。

そんなことをしている間にも暴言を言いまくったのだが、垣根は無  
視をする。

「はっはっはっ、きかねえなあ」

「麦野を汚さないでくれませんか。超汚らしいです」

「げふっ!!」

笑っていた垣根にタックルを食らわせ、麦野を奪い返す。

まだ赤い顔のままの麦野を心配して滝壺が優しく声をかけている。

「大丈夫？ 麦野」

「だっ・・・大丈夫じゃねえよ・・・」

「大丈夫、私はそんな麦野を応援してる」

「応援する前にアイツをどうにかしろ!!」

「大丈夫、フレンダと絹旗がどうにかしてくれから」

「そうそう、任せて麦野」

黒い笑顔で垣根に近寄っていく。しかし、垣根はするりとフレンダから逃げ、またもや麦野をお姫様だっこし、翼をはやし、空を飛び、どこかに向かい始めた。

下でフレンダ達が何か言っているが、直ぐに聞こえなくなってしまった。

もう何を言っても駄目だと分かった麦野は、諦めてどこに行くのか

尋ねる。

「・・・どこに行くんだよ。オレをじっくりなぶり殺そうってのか？」

「まだ信用してなかったのかよ。だから言っただろ？お前に惚れたって」

「・・・本当にびょうい」「いない」・・・」

本当かよ、と、しつこく本当にコイツ大丈夫か？と思っていたが、垣根が不意にこっちを見たので、考えるのをやめた。  
ジロジロと麦野を見て、垣根は笑う。

「でもまあ、お前は病院が居るみたいだけだな」

その言葉を聞いて、麦野はむっとする。  
この傷は先ほど今、自分を抱えて飛んでいるこの第2位が付けたものだ。自分は関係ないように言われて腹を立てる。

「誰のせいだと思ってんだクソ野郎」

「オレのせい」

普通に答えた垣根を殴ろうとするが、オレを殴ったら落ちて死ぬぞと言われたのでしぶしぶ手をひっこめた。

「安心しろ。あり得ないほど腕のいい医者がいるんだ。そいつならお前の傷を痕も残さずに治せる」

「化け物みたいな腕だな。本当に人間かよ」

「顔はカエルににてる」

「ああそうかい」

そこで麦野は喋るのをやめる。病院につくまでしつこいくらい垣根が話しかけてきたが、無視をした。

そして、凄腕の医者がある病院につき、その医者に会い。問答無用で手術室に放り込まれた。

## 第21話 クソメルヘンは帰れ!!

「・・・ここは・・・」

真っ白い部屋の中でオレは目を覚ました。

全身がズキズキ痛む。何で怪我なんかしてんだ・・・？

（ああ、そうか昨日・・・）

第2位と戦ったんだ。そのあと、アイツに病院に連れてこられて・・・問答無用で手術室に放り込まれて・・・  
そこまで思い出して、フレンダ達はどうか気になる。



（あの後・・・どうしたんだ・・・？アイツら・・・まあ、この傷じやあ探しに行けないけどな）

探すのは諦めて、寝返りをうつ。すると、目の前にフレンダの顔があった。

ピタリと、音がつくかと思うほど動きを止め、フレンダを見る。

暫く見た後、ほかも見ると、滝壺は椅子に座って寝ており、絹旗はフレンダに抱き着いて寝ていた。

（あの後、ここまで来たのか・・・結構距離があったのにな・・・）

それでも、来てくれたのか・・・ありがとな、3人共。

怪我が治ったらなんかおごってやるよ。

そう思った時、腰に違和感を覚えた。

何かがオレの腰に巻きついてる。なんでだ？仲間は3人しかいなかったよな？とっいうことは・・・

おそるおそる腰を見る。すると、思った通り、あの変態がオレの腰に抱き着いて寝ていた。

「・・・はは☆」

メキッ（殴った）ガスッ（蹴った）バキィッ（顔面ストレートパンチ）

ぽいっ（廊下に音が捨てた音）

「~~~~~!!」（体が痛くて叫ぶの我慢してる）

「・・・」

オレ、垣根 帝督。学園都市に7人しかいない超能力者のなかの第2位。残念ながら1位は白モヤシだ。

そんなオレは。恋をした。昨日、オレの顔を殴ってきやがったガキが居やがったから遊び殺そうとしてたら変な仮面をつけた男が出てきた。オレを殴ったガキどものリーダーらしい。

能力の威力を見て、超能力者だとは分かったが、同じレベル5でもオレの足元にもおよばねえ。

そう思ってたら、野郎は自分の体が吹き飛ぶかもしれねえのに全力の「原子崩し<sup>メルトダウナー</sup>」を撃ってきた。

正直焦ったが、片方の翼が無くなったただけだった。それでも、許せなかった。三下に翼を吹き飛ばされたなんて・・・ムカついた。ぶち殺す。そう思った。

第4位は大技を使ったせいでもう動けなくなり、普通のメルトダウナーしか出せなくなっていた。

だが、そんなもの、オレにはきかない。ムカついた第4位の腹を2回蹴った。

すると、やつの仲間がギャーギャー騒ぎ始めた。五月蠅いのでオレは先に雑魚を殺そうとした。

そう思ったその時、第4位がオレの腹にツッコんできた。

勢いでオレはこける。当然、オレの怒りが頂点になる。本当に殺してやろうと、やつの顔を見た。

だが、第4位の顔を見て、オレは動きを止めた。

第4位に恋をした瞬間だった。

そうだな・・・あの時、オレの目には麦野が輝いて映った。

あの折れてしまいそうな細い体。痛みで涙を流し、目をうるうるさせ、オレの足の中で、その目で上目使い。

これで惚れない奴はこの世にいないだろ！絶対にいないって！

そのあと、なんやかんやありながら、怪我を治すためにこの病院に連れてきて、一緒に寝てたんだが・・・寝ているときにいきなりフルボッコにされた。なんでだ？オレ、何かしたか？

そのあと、廊下にゴミのように放り出され、カギをかけられてしまった。

・・・廊下寒・・・

何とかして中に入れてもらおう。

「おい。オレも入れてくれよー」

「黙れ変態！消えろ変態！息泊めて死ねクソ変態野郎！！！！！！」

「！！！！」

いくらなんでもそれはオレでも傷つくぞ！こうなりゃ、力づくだ！！  
オレはドアノブに手をかけ、ドアを壊そうとしはじめる。流石に病院で能力は使えない。

「開けろ～～！！ドア壊す！！」

「誰が開けるか！！ドアを壊そうとすんな変態！！」

「なんでオレが変態なんだ！？」

「同性に恋した時点で変態だ！」

「世の中にはそんな奴はたくさんいる！だからオレは変態じゃない  
！」

「だって初めて会ったやつに抱きつくやつがどこにいんだ！  
！」

「ここにいる！！」

「はげろ！！」

「剥げないぞ！剥げたら頭が光るじゃねえか！！」

「光っちゃまえ！！」

怒鳴っている間にもドアを壊そうと蹴ったり殴ったりする。がつ、全然壊れない。

丈夫だなこの野郎・・・

てか、本当にどうしようか。このままじゃずっと廊下にいるか帰るしかないし・・・最終手段を使うか。

オレはドアノブから手を話し、廊下を歩き始める。

「・・・言ったか・・・」

変態の足音が遠のいていくのを確認し、オレは安心する。  
やれやれ、やっと静かにできる。

「麦野、大丈夫ですか？全身傷だらけなんですから、超安静にしておいたほうがいいんじゃないですか？」

「ああ、安静にしようと思ったら変態が居たんだよ」

「大丈夫、私は変態に付きまとわれる麦野を応援してる」

「助けようか滝壺」

「あつ、そろそろ任務の時間だ。・・・麦野。どうしたらいい？」

あゝ、そういや、今週は仕事がつぷりあるんだよね、こんな時に限って・・・チクショウ。

まあ、仕方ねえ。今日は3人に頑張ってもらおうか。

「オレの傷が治るまで、3人でがんばってくれ」

「うん！分かったって訳よ！結局、この傷は働きづめの麦野を休ませるのにちょうどいいって訳よ」

3人はそれぞれ言い残して帰っていく。

さて・・・寝るか・・・さっきの変態のせいで疲れたしな。

ベットの毛布を整え、寝ようとする。そんな時、窓が開いた。

「メルヘン……ン!!!」

[illegible]

ポーズを決めて入ってきたメルヘンの顔に、すごい速さでオレの投げた椅子がぶつかった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5846x/>

---

男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

2011年12月2日19時05分発行